

古代韓日関係の成立

—弥生文化の主体問題についての検討—

趙法鍾

序論

第1章 韓日農耕文化の交流

第1節 稲作農耕文化の伝播

1. 韓日稲作農耕文化の起源と開始
2. 韓半島の稲作農耕文化と無文土器文化
3. 日本列島の稲作農耕文化の展開

第2節 弥生土器文化の成立と韓日文化交流

1. 弥生文化の開始伝代と系統
2. 韓半島の無文土器および日本列島の弥生土器文化の交流

第2章 韓日金属文化の交流

第1節 青銅器・鉄器文化の交流

1. 韓半島の青銅器文化の日本列島伝播
2. 鉄器文化の交流

第2節 青銅器・鉄器時代の墓制の様相と遺物の交流

1. 青銅器・鉄器遺物の交流様相
2. 墓制の様相

第3章 古朝鮮・三韓・三国初期の倭との交流

第1節 古朝鮮時代の日本列島との交流

1. 古朝鮮時代の倭との交流
2. 衛満朝鮮時代の対外交流
3. 衛満朝鮮時代の倭との交流

第2節 三韓・三国初期の倭との交流

1. 東夷地域における重訳外交
2. 三韓と倭との交流—文献検討—

3. 三韓と倭との交流—考古学的検討—
4. 三国初期(西暦3世紀まで)の倭との交流

結論

(要旨)

1、韓日先史文化の交流に対する韓国と日本の学界の研究成果を整理すると、日本の弥生文化成立の重要要素である水稻耕作、青銅器、鉄器などの金属文化の伝来様相について、従来日本学界および概説書ではその伝来したものや地域について曖昧に「大陸」とのみ表現する傾向があった。しかし、今回の研究活動を通じて関連する研究成果では具体的な内容が確認されており、これを明示する必要がある。例えば、稲作文化の場合、韓半島の松菊里文化の影響が確実に確認されており、青銅器の場合、細形銅剣、すなわち韓国式銅剣とも呼ばれる韓半島中心の青銅文化が日本列島に伝わったことがより具体的に言及される必要があると考えられる。

2、日本の先史考古学学会が最近行ったAMS(イオンビーム加速器質量分析法)測定による新しい年代観を根拠に弥生時代の開始時期を紀元前930年までさかのぼらなければならないという紀元前10世紀説の主張は、その前提条件として弥生文化の起源である韓半島の農耕および青銅器文化の年代も同時に上昇させなければならない。しかし、韓国学会の全般的な研究内容はこのような年代上昇に懐疑的な側面が強い。

3、日本列島の対外交流に対する最初の歴史記録である『山海経』や『漢書』地理志の記録について、日本学会では中国との直接的な交流の出発と根拠とすることが多い。しかし、この度の研究を通じて、古朝鮮、蓋国などと倭の間に存在した交流と緊密な関係を説明した内容であることが見えてきた。また、衛満朝鮮以降、成立した楽浪・帯方などの郡県との関係も同じく、衛満朝鮮と倭の間に存在した交流関係が前提にあったという点で、古朝鮮と倭との関係が確認された。従来、こうした理解が両国の概説書や研究において明示されておらず、これに対する事実とその意味付けが必要である。

4、重訳外交の主体としての古朝鮮、三韓、三国の役割確認

この度の研究で古朝鮮および三韓を包括した倭との関係を説明する用語として重訳外交が確認された。すなわち、東夷世界が中国との関係を維持するにあたって、重訳を行う重訳国家と被重訳国家や種族の間に附庸国的な性格の関係が存在したことが分かった。また、三韓が倭と郡県とを結ぶ重訳を行ったという記録からこの関係が継続的に『晋書』に記述されていることが分かった。こうした古代の重訳外交を展開した三韓と倭殿関係についてより具体的に検討していく必要がある。

5、先史・古代の韓日関係を理解するためには今後、両国の考古学的成果を体系化して統合可能な研究が必要である。

(キーワード)

彌生文化、稲作文化、細形銅剣、衛滿朝鮮、重訳外交

序論

先史・古代の韓日関係段階の形式と展開は新石器時代以来、玄海灘を中心とした物的、人的交流を土台にして韓半島の無文土器、水稻耕作、青銅器—鉄器文化が日本列島に伝来し、水稻耕作・金属文化に象徴される弥生文化を形成することによって本格化した。また、以後の古朝鮮、三韓、および三国初期段階の記録にこうした文化的交流を具体的に窺わせる内容が現れる。こうした先史以来古代史初期に展開した韓半島と日本列島との交流については、韓日両国の学界が様々な角度から研究を行っており、とりわけ弥生文化の成立に関しては教科書および両国の概説書でも取り上げられている。

本研究は、この時代に対する韓日両国の学界の研究成果を整理し、各分野の意見を検討して、韓日両国の教科書および関連資料執筆者に研究の概要および争点を紹介すべく、韓日歴史共同研究委員会の目的を達成することを目指している。

本研究は、稲作農耕文化の伝播過程を検討し、韓日稲作農耕文化の起源とその始まりに関する実情を通して、韓日農耕文化の交流様相を把握しようとするものである。そして、韓半島の稲作農耕文化と無文土器文化の具体的内容を定立させ、日本列島の稲作農耕文化の展開様相を相互に関連付けて把握することにより、韓日農耕文化交流の実態を確認し、これを通じて韓半島の先史時代的水稻耕作文化が日本列島に人間の移動による技術と文化伝播を通じて成立したことを捉えようと思う。

一方、弥生文化の成立に関連する韓日文化交流を検討し、最近日本の先史考古学界でAMS測定法によって新しく提起された弥生時代紀元前10世紀開始説に対する検討を行おうと思う。これらを通じて日本列島地域の弥生文化の開始年代の上昇はもちろん、単純な年代上昇にとどまらず満洲・韓半島の青銅器および鉄器文化の年代に連動する問題であることを、東アジア青銅器鉄器文化の年代観に対する全面的な再検討を通じて確認しようと思う。また、韓日金属文化の交流様相を青銅器、鉄器遺物の交流と墓制など物的、人的交流の具体的状況を整理し検討する。これにより青銅器、鉄器文化の交流もしくは技術を含む人間集団の移住によって出現した事実を確認しようと思う。

同時に歴史時代の交流について検討する。そのために古朝鮮・三韓・三国初期の倭との交流をそれぞれ分けて、古朝鮮時代の日本列島との交流については古朝鮮の対外関係と衛滿朝鮮時第の対外交流、そして衛滿朝鮮期の倭との交流を考古学的資料に基づいて検討する。また三韓と三国時代初期の倭との交流の実像を捉えるべく、東夷地域における重訳外交の具体的内容を検討し、三韓と倭との交流に対する文献検討と考古学的資料の検討を関連づけて論じ、重訳外交の中心に古朝鮮、三韓が存在したことを明らかにしようと思う。

第1章 韓日農耕文化の交流

第1節 稲作農耕文化の伝播

1. 韓日農耕文化の起源と開始

東アジアの稲作に関連する議論は、栽培稲の起源と稲作農法、とりわけ水田稲作の伝播過程についての議論を中心に進められてきた。現存の稲は、大きく長粒形のインディカ米と、短粒形のジャポニカ米に分類され、これらの起源は、大別して中国南部に分布する多年生と南アジアに分布する一年生の普通野生稲に求められている¹⁾。これらの連関性については、1990年代以降行われてきたDNA分析を通じて栽培稲の2つの生態型であるインディカ米とジャポニカ米がそれぞれ一年生と多年生の普通野生稲に起源するという二元説が提起された²⁾。このような見解について中国の学界はこの2品種がいずれも中国に起源するものと認識している³⁾。しかし、中国の現地野生稲のDNA分析⁴⁾および葉緑体、および核のDNA配列変異の分析により、ジャポニカ米は中国南部の多年生野生稲、インディカ米は南アジア東部、東南アジア西部を含むヒマラヤ以南の一年生野生稲に起源するものとされ、古代米のDNA分析でも中国の古代米はすべてジャポニカ米と考えられることより⁵⁾、二元起源説が有力視されている。このような事実は、韓半島の稲と日本列島の稲の起源を中国南部と直接的に結びつけるものであることを示唆する。

韓国の水田稲作文化の伝来系統と年代の問題に関連して、中国の稲作文化の関連資料として最も古いものとして、長江流域の新石器早期（紀元前1万-7500年）の遺跡である彭頭山遺跡の炭化米とプラントオパール（植物硅酸体）⁶⁾と新石器晚期（紀元前5000-3000年）の河姆渡文化期の炭化米⁷⁾、馬家浜文化期（紀元前5000-4000）の江蘇省草鞋山遺跡の水田遺跡が確認されている。また、韓半島の稲作伝来と直接的な関連が高い地域である山東半島の烟台市楊家圈遺跡（紀元前2500-2000）と遼東半島大連市の大嘴子遺跡（紀元前1900-1300）においても炭化米が確認されている⁸⁾。こうした中国農耕文化および稲作の韓半島伝来は、紀元前4000年頃の新石器文化段階の、黄海道鳳山郡智塔里、鳳山郡馬山里、平壤南京遺跡などで、稗、粟などが出土し、雑穀・畑作農業が確認され⁹⁾、京畿道高陽および

¹⁾ 安承模、1999、『아시아 栽培稻의 起源과 分化』、学研文化社

²⁾ 佐藤洋一郎、1996、『DNAが語る稲作文明—起源と展開』、NHK Books；1999、『DNA考古学』、東洋書店

³⁾ Sun, C. et al. 2002, Genetic differentiation for nuclear, mitochondrial and chloroplast genomes in common wild rice (*Oryza rufipogon* Griff) and cultivated rice (*Oryza sativa* L.), *Theoretic and Applied Genetics* 104 (8)

안승모、2006、「재배도의 기원과 韓半島로의 전래—도자료를 중심으로—」、『일한교류전 稻の来た道』、p.70-71

稲の葉緑体のDNAの環に一年生とインディカは欠失部分が存在するが、反面、多年生とジャポニカは欠失部分がなく、中国の野生稲にこのような現象がすべて存在するのか、存在しないのかに対する見解の違いがある。

⁴⁾ Cheng, Chaoyang et al. 2003, Polyphyletic Origin of Cultivated Rice: Based on the Interspersion Pattern of SINEs. *Mol Biol Evol* 20.

⁵⁾ 佐藤洋一郎、1999、『DNA考古学』、東洋書店

⁶⁾ 裴安平、1989、「彭頭山文化的稲作遺傳與中國史前稻作農業」『農業考古』1989-2

⁷⁾ 浙江省博物館、1981、「河姆渡遺蹟動植物遺存的研究」『浙江省文物考古学刊』1

⁸⁾ 許明綱、劉俊勇、1991、「大嘴子青銅器時代遺址發掘記略」『遼海文物学刊』1991-1

⁹⁾ 변사성、고영남、1989、「마산리유적의 신석기시대 집자리에 대하여」『조선고고연구』4.

金浦、一山などの新石器時代後期の炭化米を通じて陸稲耕作が確認されている。

一方、1万年以前の様相を示す清原小魯里の13000-15000年bp土炭層の稲粃の例を除けば、韓半島における栽培稲の出現は5000年前頃となる。京畿道高陽市大化里の土炭稲粃の年代が4070±80bpであり、紀元前2880年から2450年であることを示している¹⁰。しかし、紀元前3000年頃、韓半島の西海岸における稲作は、中国の稲作地域と関連付けて捉えるべきであるが、中国三島地域の稲作は紀元前2500年頃の龍山時代に出現し、紀元前3000年以前の稲作の北元は淮河流域であるという点から、この時期の稲作の展開については留保しておきたい。

したがって、韓半島における農耕社会への転換と水稲耕作の本格化は、新石器時代の植物栽培の様相が存在し、忠北沃川大川里遺跡で稲の栽培が確認されているが¹¹、大部分の地域では、水田や畑の遺構が確認されておらず、居住地における栽培植物遺体の確認が困難であるという事実、そして、栽培に必要な道具がまだなかったと考えられることから、多くの論者はこの時期を農耕社会と把握していない¹²。それゆえに、農耕民は気候の寒冷化にともなう移動¹³と狩猟採集民の人口増加にともなう農耕への移行¹⁴といった状況が進行しつつ、無文土器段階に本格的な農耕社会への転換があったものと考えられている。

2. 韓半島の稲作農耕文化と無文土器文化

韓半島の稲作農耕は無文土器文化の展開と関連することから、無文土器時代¹⁵とも通称されており、青銅器時代と表現されることもある¹⁶。1980年代まで韓半島の農耕に関する研究は、稲作の起源と伝播が中心であったが、1990年代以降、大きな単位の集落発掘、栽培植物遺体や耕作遺構の発見などにより農耕社会に対する多角的なアプローチが行われるようになった。とりわけ、農耕社会の展開の核心部分は水稲農耕の本格化であり、技術力や労働組織の基盤となる社会全般の変化をともなう生産方式の変化を前提としたものである。

韓半島の無文土器時代の水稲農耕の本格的な始まりについては、松菊里土器文化以前、もしくは松菊里土器文化以後とみる2つの見解に分かれている。以前説は、蔚山也音洞の水田遺構¹⁷、密陽琴川

¹⁰ 安承模、2007、「栽培稲の起源과 韓半島로의 傳來—稻資料를 中心으로—」『日韓交流展 稲の来た道』p.73.

¹¹ 한창균 외, 2002, 「옥천 대천리유적의 신석기시대 집자리 연구」『한국신석기연구회 학술발표집』. 구자진, 2003, 『옥천 대천리의 신석기 집자리에 대한 연구』, 한남대석사논문

¹² 이진민, 2007, 남한지역 農耕사회의 성립과 전개, 요시노가리 일본속의 고대한국, p.296.

¹³ 안재호, 2000, 「한국 農耕사회의 성립」『한국고고학보』43, p.51.

김재윤, 2003, 『한반도 刻目突帶土器의 편년과 계보』 부산대석사논문, p.85.

¹⁴ 이준정, 2001, 「수렵채집경제에서 농경으로의 전이과정에 대한 이론적 고찰」『영남고고학』28, pp.20.

¹⁵ 青銅器時代と無文土器時代という概念は、無文土器の使用、青銅器の使用と生産、農耕社会の成立、磨製石劍、石鏃などの武器類と磨製石斧、半月形石刃など磨製石器類の製作、支石墓に代表される集团的墳墓築造の時代を説明する用語として使用している。青銅器時代という表現は、東北アジア地域を総括する観点からの用語とすれば、無文土器時代は韓半島に限定される表現であるという点で意味が異なる。とくに、青銅器は前期後半に登場するという点で、無文土器と開始時期の違いを持っているという特徴を持った概念である。

배진성, 2007, 『無文土器文化의 成立과 階層社會』, 서경문화사, p.22-23

¹⁶ 최몽룡, 1997, 「청동기시대」『한국사』3, 국사편찬위원회

최몽룡, 2008, 「동북아시아적 관점에서 본 한국청동기, 철기시대의 연구방향」『한국 청동기, 철기시대와 고대사회의 복원』주류성출판사

¹⁷ 박종철, 이진주, 2003, 「우리나라의 논유구 집성」『한국의 農耕문화』6, 경기대학교박물관

里の可樂洞式住居遺構とその関係施設¹⁸を根拠として提起されている。以後説は、水田が発見された論山麻田里、保寧寬倉里、扶餘クボン(구봉)里遺跡で出土した炭化米、大規模集落を根拠にして、松菊里式土器の段階における水稻耕作の本格化を想定している¹⁹。社会全般の変化という観点よりみれば、後者の説がより注目されている。

韓半島南部地域の無文土器の展開様相は、土器相を根拠として前期(馱三洞文化:孔列土器、可樂洞式:二重口縁単斜線文土器、欣岩里式土器)、中期(松菊里式土器;外反口縁土器)、後期(粘土帶土器)の3時期に区分され、これに早期の刻目突帯文土器が設定され、さらに粘土帶土器を鉄器時代と捉える立場が開陳されるに至り、学界では粘土帶土器を含む4段階説²⁰とこれを含まない早期—前期—中期—後期の4分期説が定着した²¹。しかし、後者の場合、前期・中期に該当する土器の多様な出土様相は、時期的な様相というよりも地域的系統性の差違である可能性があり、特定の様相を単純に適用させるには難があるということもあって、早期—前期—後期と設定することもある²²。しかし、粘土帶土器文化を鉄器文化として時代区分し、説明するのが適切であると考えられることから、早期—前期—松菊里文化段階として説明する時代概念が使用されている²³。

韓半島の無文土器早期と編年される刻目突帯文土器文化²⁴は上圍石式爐址を備える無柱孔の方形、長方形の住居地、深鉢形の刻目突帯文土器、両刃の半月形石刀を特徴とし、ソウルの湊沙里遺跡、南江ダム水没地区の晋州大坪里漁隠1地区、旌善アウラジ(아우라지)、金陵松菊里、淳昌院村遺跡などにみられ、南韓地域に登場する最初の農耕社会と考えられている²⁵。この文化の起源は豆満江流域²⁶、鴨緑江中上流流域²⁷とされており、鴨緑江の公貴里、深貴里遺蹟との類似性が指摘されている。この土器は、新石器時代末期の土器と共存しているが²⁸、平底鉢を主とする土器、半月形石刀、石斧、鉋刃からなる石器群、長方形住居地、海洋資源を利用しないという様相は、のちに続く馱三洞・可樂洞土器文化と同様であり、在地文化の変化ではなく、新しい集団の移住として説明されている。最近はこの文化を青銅器時代の上限年代の指標とし、紀元前2000~1500年頃と考えている²⁹。

紀元前2000年頃から始まる無文土器時代の前期には、韓半島の大部分の地域で稲作が進んだ。稲作が行われた前期文化のうち、西北地方は独楽型土器文化、中部・南部では孔列文土器が中心をな

18) 이상길, 김미영, 2003, 「밀양금천리유적」『고구려고고학의 제문제』제27회 한국고고학전국대회

19) 고려대학교 고고환경연구소편, 2005, 『송국리문화를 통해본 농경사회의 문화체계』, 서경

20) この場合、前述の3期区分に早期として刻目突帯文土器段階が加えられる。

21) 粘土帶土器文化を含まない場合の南韓地域の無文土器文化の時代編年は、次のように4期に区分される。早期(刻目)突帯文土器—前期(可樂洞、馱三洞式土器)—中期(欣岩里式土器)—後期(松菊里式土器)。

裴眞辰, 2007, 『無文土器文化의 成立과 階層社會』, 서경문화사, p.15

22) 安在皓, 2006, 『青銅器時代 聚落研究』, 釜山大学校 博士学位論文

23) 김장석, 2007, 「青銅器時代」『한국고고학강의』, 한국고고학회, p.75

24) 안재호, 2000, 「한국 農耕사회의 성립」『한국고고학보』43

刻目突帯文土器文化は、ミサリ遺跡発掘以降、晋州南江ダム水没地区で確認され、一時代として設定されるようになった。

25) 이진민, 2007, 「남한지역 農耕사회의 성립과 전개」, 『요시노가리 일본속의 고대한국』 p.299

26) 김재운, 2003, 『한반도 刻目突帯文土器의 편년과 계보』, 부산대석사논문 p.85

27) 천선행, 2005, 「한반도 돌대문土器의 형성과 전개」『한국고고학보』57

28) 국립김해박물관, 2004, 『韓國円形粘土帶土器文化 資料集』

29) 최몽룡, 2008, 『한국청동기·철기시대와 고대사회의 복원』주류성출판사, p.87

す駅三洞・欣岩里類型³⁰と二重口縁土器系統の可樂洞類型があった。

駅三洞文化は、孔列土器、小型の赤色磨研土器、無施設式爐址を備えた長方形ないし細長方形の住居地を特徴として南韓に分布する。石器は、魚形、舟形石刀、二段柄式石剣、三角湾入二段茎鐮、円筒形蛤刃石斧などが出土している。この文化の起源は、東北韓、西北韓説などが提起されているが、外部文化の在地的受容説も提示されている³¹。可樂洞文化は、二重口縁単斜線文土器、囲石式爐址を備えた方形、長方形の居住址を特徴として、錦江流域に分布し、その起源は鴨緑江下流、清川江一大同江流域の獨樂型土器文化とつながる³²。2つの文化は居住址の配置、石器製作において共通点が多く、生活様式も同じものと考えられる。すなわち、稲、麦、粟、黍などの栽培植物遺体、耕作遺構、収穫具である半月形石刀、伐木具としての磨製石斧、数世代にわたる共同居住を反映した住居地の細長化、群集化は農耕が生業全般を規定した社会であることを窺わせる³³。

無土器時代の稲作関連遺物である炭化米は、獨樂型土器文化においては平壤南京36号住居地、刻目突帯文土器文化である美沙里類型においては晋州大坪里漁隠1地区、104号住居地、可樂洞および欣岩里類型においては江陵校洞1号居住地、驪州欣岩里12号で出土している。したがって、無土器時代には全地域および文化内容において稲作農耕が進行していたことを窺わせる。韓半島の無土器前期の稲作は新石器時代の稲作の連続、あるいは遼東の異なる青銅器文化と同時に伝来した可能性があるが、後者の立場から議論が展開されている。この伝来ルートは、遼東から鴨緑江、清川江を経て江原道東海岸を越え、さらに南韓地域に拡大したルート、遼東から西海岸にいたるルートが想定されている³⁴。

松菊里類型の文化は、無土器中期もしくは後期に編年されるが、韓半島で水田稲作文化が本格的に展開し、灌漑をとまなう水稲耕作が完成した時期である。この文化の発生は、忠南西海岸—錦江中下流域であり、分館の起源については自生説と外來說が並存し³⁵、論山麻田里、蔚山玉峴の小区画水田が発見され、畑と階段式水田は前期から存続する。この文化に特徴的な様相は、中央に楕円形の柱孔をもった円形居住地、外反口縁土器、三角形石刀、石溝石斧をセットとし、忠清・湖南・嶺南地域に分布しており、居住地については炉址があまり発見されず、貯蔵堅穴が別途備わっており、居住地の規模が世代別に分離されていたことを示している。また、木材加工のために単刃石斧の発達や水田遺構の増加、三角形石刀の存在は本格的な水稲農耕や人口の増加を窺わせる³⁶。

一方、無土器時代の耕作形態は、沖積地の畑作、山地における焼畑(火田)、丘陵地の水田に大別されるが、焼畑や畑作は前期より、水稲耕作は中期から開始されると考えられている³⁷。他方、韓半島

³⁰ 欣岩里類型は、駅三洞式の孔列と可樂洞式の二重口縁、単斜線文が1つの土器もしくは同一遺構で共伴する特徴を持っており、西北系と東北系の複合遺跡と考えられる。

이백규, 1974, 「경기도출토 無文土器 마제석기」『고고학』3, 最近では、この文化は駅三洞文化の範疇に入ると考えられている。

³¹ 김장석, 2001, 「혼암리유형재고」, 『영남고고학』28

³² 이형원, 2001, 前掲論文

³³ 이진민, 2007, 「남한지역農耕사회의 성립과 전개」, 『요시노가리 일본속의 고대한국』pp.302-303

³⁴ 안승모, 2007, 前掲書 p.75

³⁵ 이진무, 1992, 「송국리형 주거분류시론」, 『택와허선도선생정년기념 한국사학논총』

³⁶ 이홍중, 2005, 「송국리문화의 문화접촉과 문화변동」, 『한국상고사학보』48

³⁷ 안재호, 2006, 靑銅器時代취락연구, 부산대학교 고고학과 박사학위논문

の稲作ははじめから水稲耕作の形態をとって伝播し、陸稲は畑遺構で粳のプラントオパールが大量に検出された光州新昌洞遺跡を根拠として、紀元前1世紀以降に始まったものとみられている³⁸。韓半島の稲作は、長江流域の稲作が山東・遼東半島の渤海湾に沿って伝来し、水稲耕作・陸稲耕作が同時に入ってきたものと把握し、遺跡の立地によって畑作、雨水を利用した水田耕作、灌漑水田など多様な形態をとって展開したとみるのが³⁹適切であると理解される。

また、無文土器時代の石器は、石剣、石鏃、半月形石刀、有溝石斧に対する検討が中心であった。石剣、とりわけ有柄式石剣は韓半島で発達したことが力説されており、石鏃の場合、無茎式から有茎式への変化に関する検討が行われてきた。とくに石製工具類は伐採石斧、有溝石斧、扁平形の石斧、石鑿など4種類の工具類が主に出土しているが、これは発見された農耕技術に不可欠の木製農耕具製作と密接に関連するものであり、農耕文化の様相を説明する重要な要素である⁴⁰。とくに、これは遼寧地域の新石器時代から青銅器時代へと移行する時期に、遼西では牧畜と農耕が共存する形態であったが、遼東地域は家畜の飼育化がみられない農耕中心の社会であったという理解⁴¹と結びつく生活様式である。

一方、有溝石斧は韓半島の無文土器の独特の要素であり、木製道具の生産力向上を可能にし、松菊里文化圏にだけで使用された両刃の三角形石刀は東北アジアにおいて韓半島だけに特徴的な発明品として捉えられている⁴²。

3. 日本列島の稲作農耕文化の展開

韓半島の稲作農耕は無文土器時代の中期に該当する松菊里文化の時期に本格的に日本列島に伝えられ、北部九州地域を中心にして定着していったものと考えられている。これは、北部九州の玄界灘沿岸の平野部、すなわち佐賀県唐津市菜畑、宇木汲田、福岡県二丈町曲り田、福岡市有田、板付などの早期稲作遺跡の分布によって知られる⁴³。とくに、板付遺跡、野多目遺跡の水田遺構は、韓国の蔚山玉峴遺跡や論山麻田里遺跡のように小区画の水田であり、同一の様相を持っている。三角形石刀、有茎石斧、磨製石剣、石鏃など韓半島青銅器文化の様相と軌を一にして環濠集落や松菊里型住居地、支石墓を特徴とする集団による農耕文化が伝播したことを窺わせる。竪穴住居や貯蔵穴の別途配置などの新しい住居形式、および石棺墓に代表される松菊里文化の影響は北部九州の内海である有明海沿岸の佐賀平野に位置する吉野ヶ里遺跡や久保泉丸山遺跡にもほとんど同時に出現している⁴⁴。これは松菊里文化が日本の弥生文化の形成に最も直接的に影響を与えた文化であることを示している。

日本列島地域への稲作伝来ルートに対する日本の学界の立場は、従来、次のような5つが提示されていた。すなわち、①中国北部—韓半島—北部九州、②山東半島—韓半島—北部九州、③中国北部

³⁸⁾ 조현중, 2004, 「우리나라 도작농경의 기원과 도작유형」, 『농업사학회지』 3(2)

³⁹⁾ 안승모, 2002, 「韓國と日本の初期稲作—未解決の諸問題—」『朝鮮半島と日本の相互交渉に関する総合学術調査』

안승모, 2006, 前掲論文

⁴⁰⁾ 배진성, 2005, 「무문토기시대 석기의 지역색과 조성변화」『사람과 돌』, 국립대구박물관

⁴¹⁾ 千葉基次, 1996, 「遼東青銅器時代開始期」『東北アジアの考古学』, 깊은샘

⁴²⁾ 배진성, 2007, 前掲書, p.18

⁴³⁾ 조현중, 2000, 〈일본의 도작농경연구—미생시대 水田을 중심으로〉《호남고고학보》11

⁴⁴⁾ 深澤芳樹, 2005, 「弥生時代概説」『日本考古学』小学館

一韓半島中西部—北部九州、④中国長江下流—九州(直接渡來說)、⑤沖縄諸島—九州(南方渡來說)であり、④の直接渡來說の場合、農耕関連の遺物が全く発見されていない点、⑤南方渡來說の場合、関連する米の年代が紀元前7-8世紀を遡らないことから否定されている⁴⁵。

したがって、日本の初期稲作は韓半島から伝来したという見解は、韓日両国の学界に共通した見解である。すなわち、水稻農耕と灌漑農耕技術、農耕道具、米の粒形、作物組成および文化要素全般において、弥生早期の稲作は松菊里文化の要素とともに韓半島南部地域から伝来したことに理解を示している⁴⁶。

一方、日本の学界では縄文時代の稲作を熱帯型のジャポニカの畑作と考え、照葉樹林型の畑作が南路を通じて日本列島に流入したという華南からの直接渡來說が提起されている⁴⁷。だが、南路の作物考古学的資料は乏しく、反対に韓半島と九州は縄文土器時代と無文土器前期の活発な交流があり、韓半島にも熱帯型のジャポニカに近い粒形が存在することから、縄文稲作もまた韓半島から伝わったものと考えられている⁴⁸。このような様相は日本列島の農耕地域の分布を通じて確認される。すなわち、日本の九州北部地域の稲作関連遺跡が分布する。玄界灘地域に繋がる佐賀県唐津市の菜畑遺跡、福岡県二丈町江辻遺跡、曲り田、福岡市板付遺跡、那珂遺跡などで縄文晩期の農業集落、環濠集落および水田遺跡が発見され、この地域を中心に韓半島の無文土器文化が流入したものと理解されている。すなわち、初期の稲作と韓半島の先進文化が玄界灘沿岸の佐賀県唐津平野に伝播し、以後、福岡県糸島平野、福岡平野へと拡散し、広い意味での筑紫平野に広がったと理解されている⁴⁹。しかし、佐賀県佐賀市の久保泉丸山遺跡の夜臼式土器の種籾の痕跡、吉野ヶ里遺跡の環濠の縄文晩期の稲のプラントオパールはほとんど同じ時期に、有明海沿岸から佐賀平野に展開したことを示唆し⁵⁰、韓半島からの農耕文化関連の渡来集団の規模が大規模であったことが知られる。このような事実は、この一帯の支石墓分布の様相からも確認できる。日本では稲作伝来ルート为中国の長江および淮河関連経路が提起されても⁵¹いるが、北部九州の初期稲作農耕の石製・木製農耕具が韓半島の系譜を示しているという点から、時間差・地位差による逐次的な伝播様相と理解される⁵²。

ところで、水稻農耕は組織化された農業生産形態を反映している。すなわち、水田耕作のための育苗および食糧調節、草取り、施肥など農耕過程に対する知識と統制が必要であり、木製の鋤や鍬などの木工具とこれを製作するための石斧、石手斧、石鉋刃、石鑿などの木製加工具や収獲用具である石包丁など多様な工具類の製作および活用を伴う。また、水稻耕作のための定住化、耕作地の土地所有および世襲、農業用水の統制と調整、労働の組織化、剰余生産の統制など政治権力の形成をもたらすという点で、韓半島と日本列島における稲作問題は社会と文化変容の出発点として浮かび上がる。また、弥生文化の要素は水稻農耕と同時に貯蔵用の壺形土器、磨製石斧、石剣、石鏃、支石墓、豚の飼育

⁴⁵ 佐原眞、2007、「稲、鉄器、青銅器」『日本の考古学』上、学生社、pp.273-274

⁴⁶ 深澤芳樹、2005、「弥生時代概説」『日本考古学』小学館

⁴⁷ 森貞次郎、1985、『縄文農耕』

⁴⁸ 안승모、2006、前掲論文、p.76

⁴⁹ 片岡宏二、2006『弥生時代 渡来人から倭人社会へ』、雄山閣

⁵⁰ 七田忠昭、2007「吉野ヶ里遺跡—佐賀平野に花開いた韓半島の文化」『한일문화교류—韓半島와 일본규슈』p.98

⁵¹ 和佐野喜久生、1998、「江南行 日本稲のルーツを求めて」『虹を見た』海援社。

⁵² 七田忠昭、2007、前掲論文

などであり、韓半島の無文土器文化と共通の様相を示している⁵³。

一方、日本の初期農耕文化では、家畜の飼育が行われていなかった⁵⁴と考えられているが、弥生集落で発見されたイノシシの骨についての分析を通じて稲作農耕と同時に新種の豚が輸入されていたとし⁵⁵、弥生時代から古代にかけて家畜の飼育が行われたと推定される⁵⁶。これは弥生時代の水稻耕作の開始による変化が生活様式の変化と同時に担い手の変化など全面的なものであったことを示す内容であり、韓半島で青銅器遺跡と報告されている犬や豚の骨に対する報告と関連付けられている⁵⁷。また、新石器時代の韓半島から縄文時代の九州に伝わった結合式釣針や組合銚の伝統を引く逆T字形釣針は山東半島—遼東半島—韓半島南部沿岸—西北九州に分布しており⁵⁸、遼東半島の稲作栽培文化と韓半島へと繋がる漁労活動文化の関連性も確認される。

日本の学界では従来縄文人から弥生人への変化について、縄文人が進化して弥生人になったという小進化説⁵⁹と九州の山口県土井ヶ浜遺跡の人骨が縄文人とは大きな違いがある点から韓半島渡來說⁶⁰をとる立場に分かれている。従来、日本の学界では文化変容を重視する前者の立場が強調されてきたが、古人骨の研究や遺伝学的な分析を通じて現在は渡來說が有力な見解が支持を得ている。これは低顔、低身長縄文人に比べて、北部九州の弥生人の高顔、高身長化の現象にもよく現れている⁶¹。とくに、弥生人の歯牙の大型化は遺伝的な進化の逆行現象であり、韓半島からの人口移動を説明する重要な根拠と考えられており、韓半島南部の金海礼安里人骨などと北部九州、山口地域の弥生人の人骨がとても酷似した状況がこれを克明に示している⁶²。

ところで、最近、福岡市糸島半島の新町遺跡の支石墓出土の人骨が縄文人の特徴を持つことから、縄文から弥生への変革は縄文系の土着集団が主導したという意見が提示されている⁶³。しかし、韓半島南部地方の礼安里や勒島遺跡の人骨の身長が必ずしも大きくないという点⁶⁴などにより、このような論理付けには問題が指摘されている。したがって、弥生中期以降の圧倒的な弥生人骨の占有様相は韓半島から移住した渡来人の規模が大規模であるか、小規模の集団が渡来して高い人口増加率によって、占有比率が高くなったのか⁶⁵について見解が異なるが、このような推論は受け入れ難く、渡来人集団の

53) 春成秀爾、2007、「弥生時代概説」『日本の考古学』上、学生社

54) 甲元眞之、山崎純男、1984、『弥生時代の知識』東京美術

55) 西本豊弘、1993、「弥生時代ブタの形質について」『国立歴史民俗博物館研究報告』50
一方、イノシシに対するDNA検査を通じて韓半島から伝わったものではないという見解もある。
小澤智生、2000、「縄文弥生時代に豚は飼われていたか」『季刊考古学』73

56) 佐原眞、1996、『食の考古学』東京大学出版会

57) 김신규、1970、「우리나라 원시유적에서 나온 포유동물상」『고고민속문집』2

58) 甲元眞之、1999「環東中國海の先史漁撈文化」『熊本大学文学部論叢』65

59) Suzuki, H. 1969, Microevolutionally changes in the Japanese Population from the prehistoric age to the present -day, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo. Section V3.

60) 金関丈夫、1976、『日本民族の起源』法政大学出版局

61) 오세연、2000、稲作農耕사회의 형성、『겨레와 함께한 쌀』、국립중앙박물관, p.44

62) 金鎮晶、小片丘彦、峰和治、竹中正巳、佐熊政史、除レイ男、1993、「金海禮安里古墳出土人骨」『釜山大学校博物館遺蹟調査報告』15

63) 金関恕、大阪府立弥生文化博物館編、1995、『弥生文化の成立—大変革の主体は縄文人だった』角川書店

64) 春成秀彌、1989、「朝鮮半島における戦乱と人々の移動」『弥生時代の始まり』考古学叢書11、東京大学出版会

65) 中橋孝博、2005、『日本人の起源』講談社

持続的な拡大を通じて社会変化や水稲農耕が進行したと理解されている⁶⁶。

第2節 弥生土器文化の成立と韓日文化交流

1. 弥生文化の開始年代と系統

日本の弥生時代の年代観は、1960年代まで紀元前3世紀—紀元前3世紀までと考えられてきたのに対し⁶⁷、1970年代、岡崎敬は1960年宇木汲田貝塚のC14年代を根拠にして、縄文晩期の夜臼式土器を紀元前5-4世紀、弥生前半前期の板付 I 式土器を紀元前4-3世紀に比定し、中期後半は紀元前1世紀と考えて、紀元後3世紀まで存続した文化と考え⁶⁸、橋口達也が北部九州の甕棺に副葬された漢鏡の年代などを検討して、板付 I 式土器の上限を紀元前300年前後と見て以来、板付 I 式土器を弥生時代の開始と結びつけて捉えた。1978年、北部九州における水稲農耕の開始年代を縄文晩期に編年していた刻目突帯文土器、すなわち夜臼式土器、山ノ寺土器の成立段階、すなわち水稲農耕の開始を弥生時代の開始と見なければならぬとする見解が確立し、弥生時代早期を紀元前5-4世紀、前期を紀元前3世紀に調整した⁶⁹。

したがって、2003年以前までは稲作農耕を伴う文化が北部九州地域を中心に登場する始点として、紀元前450年頃に比定し、縄文晩期、弥生早期（紀元前5-4世紀）—弥生前期（紀元前3-2世紀初）—弥生中期（紀元前2世紀初—紀元前1世紀ないし紀元後1世紀初）—弥生後期（紀元後1-3世紀中葉）と時期区分され⁷⁰、議論が進められている。

ところで、2003年、日本の歴史民俗博物館チーム（以下「歴博」と略称）が土器に対するAMS（イオンビーム加速器質量分析法）測定による新しい年代観を根拠として、弥生時代の始まりは紀元前930年まで遡及しなければならないという紀元前10世紀説を提起し、開始年代に大きな混乱が生まれた⁷¹。まず、「歴博」が提示したAMS編年によって、弥生時代の編年は、早期（先 I 期、紀元前10-9世紀）、前期（I 期、紀元前8-4世紀）、中期（II—IV期、紀元前4—紀元後1世紀）、後期（V、VI期、紀元後1-3世紀）となる⁷²。

この見解に対して、日本の学界は賛否両論あるが、賛成の場合、韓国の青銅器文化の年代遡及⁷³、

⁶⁶ 中橋孝博、2007、「縄文時代から弥生時代へ」『日本の考古学』上、学生社、pp.253-255

⁶⁷ 小林行雄、1951、『日本考古学概説』、創元選書 218、創元社、pp.162-163

この根拠は北部九州の甕棺墓に輻射された前漢鏡の年代であり、弥生中期の上限を紀元前1世紀とし、中期の下限は王莽の貨泉によって紀元後1世紀前半以降とした。弥生前期は紀元前1世紀以前に、200年を足して、2、3世紀に始まったものと推定した。

⁶⁸ 岡崎敬、1971、「日本考古学の方法」『古代の日本』9、角川書店、pp.30-53

⁶⁹ 鄭漢徳、2002、『日本の考古学』学研文化史、p.140

⁷⁰ 鄭漢徳、2002、『日本の考古学』学研文化史、p.154

⁷¹ これによれば、弥生早期の実年代は、紀元前930年頃、前期は紀元前810年頃、中期は350年頃、後期は紀元前後となる。これは既存の年代観より500年以上遡ることになり大きな論争になっている。

春成秀爾、藤尾慎一郎、今村峯雄、坂本稔、2003、「弥生時代の開始年代—C14年代の測定結果について—」、『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』pp.65-68

藤尾慎一郎、2004、「韓国、九州四国の実年代」、『弥生時代の実年代』学生社

⁷² 春成秀爾、2007、「弥生時代概説」、『日本の考古学』上、学生社、p.268

⁷³ 宮本一夫は歴博説を支持して、韓半島の遼寧式銅劍の年代を紀元前9世紀に遡らせた。宮本一夫、2004、「青銅器と弥生時代の暦年代」『弥生時代の実年代 炭素14年代をめぐって』学生社。岡内三眞は、歴博の発表以降、韓半島の琵琶形銅劍の改新年代を紀元前6-5世紀から紀元前9世紀に、韓国式銅劍の年代を紀元前4世

反対の場合は年代測定の過信⁷⁴、変動可能性を指摘し⁷⁵、韓半島の関連遺物の年代観との不一致を指摘している。とくに、新しい年代観に依拠するとき、問題になるのは弥生早期、前期遺跡から出土した鉄器の年代問題が生まれる。日本学界は弥生時代の鉄器を戦国の燕と関連付けて、韓半島を通じて伝来したものと考えているが⁷⁶、この場合、紀元前4世紀を越えないという問題はある。これに対して「歴博」チームは、既存の関連遺物はすべて出土地点がはっきりしなかったり、再堆積によるもの、誤認によるものと考え、これらを弥生鉄器遺物と認めていない⁷⁷。しかし、既存の弥生遺跡で出土した遺物をすべて否定することには容易に同意できず、年代を合わせるための強弁である可能性が高い。

一方、このような賛成・反対意見と同時に、年代上限の遡及を韓国、中国遺跡に対する年代の再検討を通じて進めようとする立場もある。すなわち、弥生時代の開始年代を考えるうえで、松菊里石棺墓の琵琶形銅剣年代を春秋中期(紀元前7-6世紀)の遺物と結びつけて紀元前6世紀中葉とみたり⁷⁸、遼西地域の遼寧式銅剣と韓国式銅剣の年代を再検討して、比来洞銅剣=西周後期の小黒石溝M8501以降→松菊里1号→礼山東西里=鄭家窪子6512号と編年して、弥生開始年代を紀元前8世紀中葉から7世紀中葉に比定する見解も提出されている⁷⁹。また遼西の小黒石遺跡の青銅礼器の銘文分析を通じて小黒石の銅剣を頂点とする比来洞銅剣、欣岩里式土器-黒川式土器を結びつけて、弥生開始年代を紀元前7世紀とみる見解もある⁸⁰。一方、日本の弥生文化の成立の根拠が韓半島の松菊里文化であることを強調して、松菊里文化の年代を紀元前900年頃とみて、弥生時代の成立年代を紀元前850-800年の間とみる見解も提示されている⁸¹。このような議論から確認されることは、日本列島の最初の農耕文化である弥生文化の開始時期の年代が遡りうる前提条件として、弥生文化の起源である韓半島の農耕や青銅器文化の年代も同時に遡らなければならないということである。しかし、韓国学界ではこのような日本学界の議論にまだまだ積極的に反応していないというのが現状である。

一方、日本学界は弥生文化の系譜に関連して、縄文文化の伝統継承と韓半島など大陸文化にその

紀から紀元前5世紀に遡らせた。

岡内三眞、2004「東北式銅剣の成立と朝鮮半島への伝播」、『弥生時代の実年代 炭素14年代をめぐって』、学生社

74) 高倉洋彰は、放射線炭素年代測定値に関して、関連遺物年代が実年代と一致しない問題を提起した。高倉洋彰、2003、「弥生時代開始の新たな年代観をめぐって」『考古学ジャーナル』510。橋口達也は、福岡・曲田遺跡で鉄器が共伴した事実と北部九州の甕棺年代などを勘案するとき、新しい年代観は受け入れられないことを強調した。橋口達也、2003、「炭素14年代測定法による弥生時代の年代観に関連して」『日本考古学』16。柳田康雄は、磨製石剣の祖型を琵琶型銅剣と桃氏剣とみて、年代の上限を否定している。西谷正は弥生時代の開始時期を戦国並立期とみて、新しい年代観を受け入れられないとしている。

柳田康雄、2004、「朝鮮半島の中国式銅剣と実年代論」『九州歴史館資料論集』29、九州歴史資料館

75) 大貫静夫、2005、「最近の弥生時代年代論について」、『Anthropological Science (Japanese Series)』113巻 2号、p.106

大貫静夫は、年代測定値の変動可能性を根拠にして弥生時代の開始年代を紀元前8世紀、中期は紀元前300年頃に設定している。

76) 村上恭通、2003、「中国、朝鮮半島における鉄器の普及と弥生時代の実年代」『考古学ジャーナル』510号 朴淳發、1993、「우리나라 初期鉄器文化의 展開過程에 대한 약간의 考察」、『考古美術史論』3、忠北大考古美術史学科

77) 春成秀爾、2008、「青銅器と弥生時代の年代」、『東アジア青銅器の系譜—新弥生時代のはじまり、第3巻—』雄山閣、p.4

78) 武末純一、2004、「弥生時代の年代」『考古学と実年代』、西川壽勝、河野一隆編、ミネルヴァ書房

79) 庄田慎矢、2005、「湖西地域出土 琵琶形銅剣 弥生時代 開始年代」『湖西考古学』12、湖西考古学会

80) 甲元眞之、2006、『東北アジアの青銅器文化と社会』同成社、149-153

81) 이홍중、2000、「無文土器와 弥生土器의 實年代」『한국고고학보』60、한국고고학회

出自を求め、弥生文化のなかで日本列島独自の側面を浮かび上がらせようとした⁸²。こうした理解の延長線に縄文文化の伝統は女性の役割に関連する部分の比重が高く、大陸文化とされる文化現象は男性の役割に関連する部分が多いということが強調され⁸³、これを男性中心の韓半島からの渡来人と縄文人との混血として説明したもの⁸⁴と関連付けて捉えている⁸⁵。また、稲作栽培に関連して、弥生時代の代表的な工具である大型蛤刃石斧が縄文時代の磨製石斧の系譜に関連するとみて、縄文文化の伝統を強調している⁸⁶。

しかし、弥生文化以前の縄文時代の場合、北部九州を中心に韓半島との文化交流が頻繁であったことが、縄文前期の場合、結合式釣針、石製銚頭による新しい漁法の登場、中期の動物解体および骨角器製作に便利な石刃技法の受容などによって持続的な関係が考えられ⁸⁷、このような伝統のなかに弥生時代特有の扁平片刃石斧が登場していること⁸⁸が指摘され、韓半島からの文化受容が確認されている。

一方、弥生時代の石器は韓半島系磨製石器系統である半月形石刀、石鎌、有溝石斧、蛤刃石斧、手斧、石鑿などの工具類や一段柄式石剣、有茎式石剣、有茎式石鏃などの武器で構成されるが、釣針と黒耀石製の鏃、石錐などで構成される縄文時代の石器の組み合わせとは区分され、水稻農耕、支石墓、青銅器と同時に韓半島から伝わったことを立証している。また弥生土器文化は縄文末期の浅鉢と深鉢形態から貯蔵用の壺、炊事用の甕、取食用の豆鉢などの製作が行われ、農業生産にともなう生業経済の明確な変化が窺われる。とくに、韓半島無文土器の影響を受けて製作された貯蔵用の地壺の使用が注目される⁸⁹。

2. 韓半島の無文土器および日本列島の弥生文化の交流

日本列島、とくに九州地域で出土した韓半島の土器文化には刻目突帯文土器、孔列文土器、丹塗磨研土器、松菊里式土器、粘土帯土器などがある。弥生早期の土器である夜臼式土器(刻目突帯文土器)の起源について、日本の学界では、2つの見解がある。福岡平野で最も早い時期の水田と刻目突帯文土器が共伴したという点から、北部九州地域に初めて登場したとみる見解⁹⁰と、縄文晩期中盤に近畿地域に発生した後、北部九州地域に波及したとみる見解⁹¹である。北部九州説の場合、刻目突帯文土器の系譜について、韓半島の刻目突帯文土器にその系譜を求めている⁹²。後者の縄文継承説は、土器自体の変化相を考察したものであり、互いに異なる土器圏の交流を通じて様々な要素が結びつきながら、まず近畿地域で刻目突帯文土器が誕生し、その後九州地域に波及して、偶然、水稻耕作と結合し

⁸² 佐原真、1975、「弥生文化の三要素」『古代史発掘』2、講談社

⁸³ 甲元真之、1978、「弥生文化の系譜」、『歴史公論』4巻3号

⁸⁴ 金関丈夫、1973、「人類学からみた古代九州人」『古代アジアと九州』平凡社

⁸⁵ 甲元真之、2004、『日本の初期農耕文化と社会』同成社

⁸⁶ 下條信行、1975、「北九州における弥生時代の石器生産」、『考古学研究』22巻1号

⁸⁷ 李相均、1998、『新石器時代の 韓日文化交流』、学研文化社

⁸⁸ 甲元真之、2004、『日本の初期農耕文化と社会』同成社

⁸⁹ 국립중앙박물관、2007、『요시노가리 일본속의 고대 한국』p.30

⁹⁰ 山崎純男、1989、「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』

⁹¹ 泉拓良、1990、「西日本突帯紋土器の編年」『文化財学報 第8集』奈良大学文学部文化財学科
家根祥多、1993、「遠賀川式土器の成立をめぐって—西日本における農耕社会の成立—」『論苑考古学』

⁹² 李弘鐘、2000、「無文土器가 弥生土器 成立에 끼친 影響」『先史와 古代』14

たものとみている。また、土器文化の主体は縄文集団によって成立したものとみなし、その縄文集団が労働力として水稲耕作文化を受け入れる力量をすでに持っていたとする学説を裏付ける根拠になっている⁹³。しかし、弥生文化や縄文文化との差異性を考察すると、外来集団の関与が不可避であったという解釈も提示されており⁹⁴、つまるところ、外来文化の受容を前提にするしかないことが窺われる。

すなわち、日本列島の刻目突帯文土器の出現については、韓半島南部地域の影響が指摘され⁹⁵、本村里遺跡3号住居地出土の刻目突帯文土器や菜畑遺跡出土の夜臼式土器の絶対年代がほぼ同じであることから、日本の刻目突帯文土器の出現を韓半島南部地域に求めた⁹⁶。一方、日本の学界の一部は、韓日両地域の刻目突帯文土器の文化全体を考慮するとき、韓半島は畠作形態であるのに対し、日本列島は水田形態であり、同時に石器の組み合わせも異なるという点を挙げ、韓半島南部地域で水稲農耕文化と同時に刻目突帯文土器が出現したことを承認していない⁹⁷。このように、弥生早期の土器である刻目突帯文土器の出現については韓日の学者間で意見の相違があるが、水稲農耕を基盤とした文化体系である松菊里文化が韓半島から日本列島に渡り、弥生文化が誕生したという事実は大部分承認されている点である。ところで、その文化の主体は松菊里式土器を直接使用した集団というより、夜臼式土器の母体となる韓半島南部の刻目突帯文土器系と駅三洞系であるという点が注目される⁹⁸。こうした事実は、弥生時代のはじまる時期に出現する住居形が変形松菊里型住居であり、土器もまた松菊里式土器ではない、刻目突帯文土器や直立口縁土器という点で確認される。これは刻目突帯文土器集団が南部地域に居住しながら、松菊里文化を採用したあと、日本地域に移住した可能性と、これらの集団がまず日本列島に移住し、南部地域の駅三洞系と交流しながら、松菊里文化を採用した可能性を提起している。このような立場から見ると、日本列島の弥生文化誕生は韓半島で松菊里文化を採用した南部地域の刻目突帯文土器系や駅三洞系集団によって主導された可能性が高いと解される⁹⁹。

一方、韓半島地域の初期鉄器時代の代表的文化様相である粘土帯土器文化の出現は、遼東地域で燕将の秦開の古朝鮮侵攻時点に登場したという燕昭王代説¹⁰⁰が提起され、これとは異なる春秋末・戦国初の遼河中流域の青銅器、土器文化が韓半島の北部地域まで下ることはなく、中西部地方から入ってきて韓半島の粘土帯土器文化と深い関連性を持っていたという見解が出されている¹⁰¹。このように粘土帯土器文化は古朝鮮と深い関係を持つ遼西—遼東地域の住民移住により韓半島に登場した文化であり、紀元前6世紀末、5世紀初頭と考えられている¹⁰²。

韓半島、とりわけ嶺南地域で出土する日本列島の遺物は弥生中期の壺と甕などである。すなわち、弥生土器は嶺南海岸地方を中心に発見されており、とくに、慶南四川の勒島遺跡の場合、弥生前期末

93) 田中良之、1984、「縄文土器と弥生土器、弥生文化の研究 3：弥生土器 I」、雄山閣

94) 家根祥多、1997、「朝鮮無文土器から弥生土器へ」『立命館大学考古学論集 I』

95) 이홍중、2000、「無文土器가 弥生土器성립에 끼친 영향」『선사와 고대』14

96) 安在皓、2004、「中西部地域 無文土器時代 中期聚落의 一樣相」『韓國上古史學報』43 (韓國上古史学会)

97) 藤尾慎一郎他、2006、「弥生時代の開始年代—AMS—炭素14年代測定による高精度年代体系の構築」『弥生時代の新年代』(雄山閣)

98) 이홍중、2006、「무문토기와 弥生토기의 실연대」『한국고고학보』60

99) 이홍중、2007、『한일문화교류—韓半島와 일본규슈』、pp.30-31

100) 박순발、2004、「遼寧粘土帶土器文化의 韓半島定着過程」『錦江考古』창간호、충청문화재단연구원

101) 이진무、2003、『한국식동검문화의 연구』、高麗大学校博士論文

102) 박진일、2007、「粘土帶土器로 바라본 初期鉄器、弥生時代曆年代考」『한일문화교류、韓半島와 일본 규슈』국립중앙박물관

頃の土器が唯一出土しており、金海、釜山、蔚山などの地で弥生中期以降の城ノ越式、須玖式土器が確認されている¹⁰³。すなわち、金海会峴洞貝塚、金海大成洞小城遺跡、釜山池内洞遺跡で弥生中期（紀元前2世紀—紀元前1世紀）土器が出土しており、これらは日本製の作品、日本人が渡来してきて制作したもの、無文土器人が模造製作したものなどに分かれ、大部分粘土帯土器と同時に出土している¹⁰⁴。

一方、日本地域で出土した粘土帯土器は北部九州地域の福岡、小郡で円形粘土帯土器が弥生前期中葉の板付Ⅱ式段階土器などが同時に出土しており、長崎地域では三角型粘土帯土器が須玖式土器と同時に出土し、時期的に前後している関係である¹⁰⁵。

日本列島の弥生時代を代表する集落形態は環濠集落である。現在、鹿児島県から群馬県にかけて、約5000あまりの遺跡が確認されており¹⁰⁶、日本列島に分布する環濠集落の系譜について、日本の学界では韓半島南部からの系列と長江流域にその系譜を持つ系列を提示している¹⁰⁷。しかし、北部九州の初期農耕集落の根拠と考えられる韓半島の慶南蔚山の検丹里遺跡、忠南松菊里遺跡で環濠集落が発達しており、稲の伝播ルートと重なるという点¹⁰⁸より、北部九州の初期農耕集落は韓半島の環濠集落にその系譜を持つものと考えられる。とりわけ、北部九州地域の突帯文土器から弥生前期段階に至る集落の様相は、水田、排水路の使用、断面がV字形の外濠と内濠、区画区、竪穴住居、掘立柱建物、大型建物、貯蔵穴、墓地などが広範囲にわたって計画的に造成されているという¹⁰⁹点で、韓半島から移住した農耕集団による定着の様相を窺わせる。

第2章 韓日金属文化の交流

第1節 青銅器・鉄器文化の交流

1. 韓半島青銅器文化の日本列島伝播

韓半島と日本列島間の金属文化の交流において、韓半島には琵琶形銅剣と銅矛で構成された純粋な青銅器時代が明確な形で存在したが、日本では現在まで調査・研究の成果からみる限り、そうした段階が明確ではない。したがって、鉄器時代以降、青銅器と鉄器がほぼ同時に韓半島から日本列島に流入している¹¹⁰。また、日本列島における弥生時代の金属器の使用の特徴は、利器としては鉄器が、祭器は

¹⁰³ 안재호, 홍보식, 1998, 「삼한시대 영남지방과 북구주지방의 교섭사연구」『한국민족문화』12, 부산대학교 한국민족문화연구소

井上主税, 2006, 『嶺南地方出土 倭系遺物로 본 韓日交渉』경북대학교박사학위논문

¹⁰⁴ 국립중앙박물관, 2007, 『요시노가리 일본속의 고대 한국』, p.256

¹⁰⁵ 박진일, 2007, 前掲論文, pp.157-158

¹⁰⁶ 中村愼一編, 2001, 『東アジアの圍壁・環濠集落』平成12年度文部科学省科学研究費補助金・特定研究(A1)考古学資料集 25

¹⁰⁷ 寺澤薫, 1999, 「環濠集落の系譜」『古代学研究』146

¹⁰⁸ 藤田三郎, 2003, 「日本の農耕集落」, 『東アジアと日本の考古学』V(集落と都市), 同成社, p.84

¹⁰⁹ 藤田三郎, 2003, 前掲論文, pp.86-87

¹¹⁰ 鄭漢德, 2002, 『日本の 考古学』学研文化社, p.202

青銅器が使用され、これらの製作は行われたが、素材は韓半島より入手されたことが指摘されている¹¹¹。日本の学界は弥生青銅器文化の形成における韓半島青銅器文化の受容と定着の様相を遼寧式銅劍(琵琶形銅劍)と磨製石劍、石鏃を副葬する支石墓などの墓制に代表される「遼寧青銅器文化複合」を受容したものと考えている¹¹²。しかし、この文化は中国中原の青銅文化と明らかな違いがあり、遼東半島、韓半島および満洲地域を中心とした琵琶形銅劍と銅矛、支石墓で構成される青銅器文化の様相を示している点において韓半島を中心とした青銅器文化と考えられている¹¹³。他方、日本列島でもっとも古い青銅器遺物は弥生前期(板付I式土器時期)の遺物であり、福岡の今川遺跡から出土した両翼形銅鏃と銅鑿の場合、銅鏃は宝城徳峙里の例に同じく遼寧式銅劍や銅矛を加工して作ったものであり、銅鑿は扶餘松菊里1号石棺墓における出土例があり、今川遺跡は松菊里文化の影響を受けて形成されたものであることが知られる。問題は松菊里文化の時期である。国立歴史民族博物館のAMSによる放射線炭素年代測定の結果、年代の上限措置に対する代案として、中国紀年銘遺物を活用した較差年代法が提示され、これを琵琶形銅劍と結びつけて編年する方法が提示され、紀元前8-6世紀¹¹⁴、もしくは紀元前6世紀後半-5世紀前半と考えられてもいる¹¹⁵が、土器や石器の日韓較差編年を勘案して、紀元前4世紀頃と考える理解もある¹¹⁶。そのため、この問題は松菊里文化の年代を確立することによりその時期と性格に対する理解が変わるが、韓国と日本の学界で統一した見解を持っていないため時期の確定は困難である。

このように日本列島の青銅器文化は韓半島から各種の青銅器類が伝来したことによって始まった。北部九州をはじめとして、西日本に拡大し、青銅武器の場合、流入段階の青銅器は韓半島製のものが輸入され、北部九州の地域王権が確立する中期後半には日本列島で青銅器が生産されるようになったものと理解される。一方、最近日本の学界では青銅器の列島化の時期を弥生時代中期前半(汲田式甕棺時期)にさかのぼらせ、韓半島青銅器の輸入における一種の選択を強調する見解がある¹¹⁷。しかし、青銅器の鑄型の様相をみると、韓半島では石製品が中心になり、一部の儀器製作のために土製品使用されたものと類似するものが日本の北九州の佐賀県佐賀平野を中心に吉野ヶ里遺跡、鍋島本寸遺跡などで出土しており、その系統と内容の関連性をよく示している¹¹⁸。また、細形銅劍は北部九州の金海式甕棺期(弥生時代末期)以降に流入し、墓の副葬品として使用されている点は、韓半島と同じ背景をもって使用されたことを示している¹¹⁹。

¹¹¹ 奈良文化財研究所監修、『日本の考古学』2005、p.111

¹¹² 近澤喬一、2000、「弥生時代」『山口縣史 資料編 考古』1、山口県

¹¹³ 박진욱, 강인숙, 황기덕, 1987, 『비파형단검문화에 관한 연구』과학백과사전출판사
이영문, 1997, 『한국비파형동검문화에 대한 고찰』『한국고고학보』38

¹¹⁴ 大貫静夫、2003、「松菊里石棺墓出土の銅劍を考えるための10の覚え書き」、『第15回東アジア古代史考古学研究会交流会予稿集』、東北亞細亞考古学研究会

¹¹⁵ 庄田慎矢、2005、「日本 先史考古学の 時代區分과 年代問題」『先史와 古代』22、p.66

¹¹⁶ 武末純一、2004、「弥生時代前半期の曆年代」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』

박진일, 2007, 「粘土帶土器로 바라본 初期鉄器, 弥生時代曆年代考」『한일문화교류 韓半島와 일본 규슈』국립중앙박물관, p.162

¹¹⁷ 宮井善朗、2003、「朝鮮半島と日本列島の青銅器の比較」、『東アジアと日本の考古学』III、同成社

¹¹⁸ 後藤直、2000、「日韓の青銅器」、李弘鍾編、『韓國古代文化의 變遷과 交渉』書景文化社

¹¹⁹ 宮井善朗、2003、前掲書、p.63

2. 鉄器文化の交流

弥生時代の鉄器文化は北九州地域を中心に、九州南部、瀬戸内、山陰沿岸に拡大し、中期後葉には近畿地域に広がり、後期には関東、甲信地域まで拡大したものと考えられている¹²⁰。だが、これはすべて「舶載鉄製品」すなわち韓半島から直接伝来したものであるという点が強調されている¹²¹。弥生時代の鉄器文化の展開過程における特徴は、前期に磨製石器に代わって鉄製工具類がまず流入し、列島内での生産を可能にし、鉄鏃に続いて中期段階に鉄製武器類(剣、刀、鉾)などが使用されはじめたが、これに比べて鉄製農耕具類はその出現時期が相対的に遅れる。つまり、韓半島から伝来した「大陸系磨製石器」である蛤刃石斧、有溝石斧、半月形石刀などが、生産道具の主流をなす中で、舶載されて入ってきた鉄製農具が使用され始める弥生時代前期段階はもちろん、それ以降、土着の形態を持つ鉄製工具が列島内で製作され始める段階の北部九州における前期末—中期前半、畿内における中期前半頃にも鉄素材は日本列島内で生産し得ず、一般的に韓半島からの流入品に依存していた¹²²。このような事実は、当時、韓日両国の間の交流関係において、最も重要な事柄として考えることができるにもかかわらず、まだ、これに関する集中的な研究が足りないことが指摘され、とくに鉄器製作と鉄素材生産は別の段階として捉えなければならないことが強調されている¹²³。

弥生時代に鉄生産が始まったとする見解は、日本の学界では早くからあった。これは具体的な精錬遺跡を実証的な資料として提示したのではなく、鉄器と鍛冶遺跡などの様相を考慮した状況判断によってこれを裏付けるべく広島県三原市の小丸遺跡SF1号精錬炉を確実な弥生時代後期の鉄生産炉として提示しているが¹²⁴、追加資料が発見されず、弥生時代の鉄製生産説は脆弱なままである。一方、金属学的分析を通じて提示された5世紀以降、古墳時代の鉄生産説は¹²⁵より説得力を持っている。しかし、この時期の鉄生産遺跡である鍛冶遺跡や鉄滓関連資料が九州を中心に岡山、広島、大阪などの西日本の一部の地域でも確認され、弥生時代の後期以降には日本で独自に鉄器を製造したものと考えられている¹²⁶。

そのため、『三国志』魏書東夷伝弁辰条の「……国出鉄、韓濊倭皆縦取之……」という記事と最近の考古学資料を考慮すれば、弥生時代の後期までには韓半島の鉄素材が倭地域に供給され、一部列島内での生産も行われるようになっていたとみることができる。

しかし、考古学的にこの当時交易された鉄素材に関しては、これを板状鉄製品¹²⁷や板状鉄斧¹²⁸とみたり、中国製の鑄鉄脱炭鋼や炒鋼製鉄板とみる説¹²⁹、あるいは鉄器や素材が中国から流入したとする

¹²⁰ 野島永、2000、「弥生時代の鉄流通試論」『製鉄史論文集』

¹²¹ 川越哲志、1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣

¹²² 李南珪、2002、「日本 古代 鉄器文化의 形成—弥生時代를 中心으로—」、『강좌 한국고대사』제9권, 가락국사적개발연구원

¹²³ 李南珪、2002、前掲論文、pp.221-223

¹²⁴ 松井和幸、1986、「鉄生産の問題」『論争学説日本の考古学』4、雄山閣

¹²⁵ 大澤正己、1984、「金属学見地からみた古代製鉄」『古代を考える』36

大澤正己、1997、「弥生時代の鉄器の動向—金属学的見地からのアプローチ」『東日本における鉄器文化の収容と展開』第4回鉄器文化研究集会

¹²⁶ 村上恭通、1998、『倭人と鉄の考古学』、青木書店、pp.91-95

¹²⁷ 岡崎敬、1951、「日本における初期鉄製品問題」『考古学雑誌』42-1

¹²⁸ 東潮、1995、「弁辰과 加耶의 鉄」『加耶諸國의 鉄』加耶研究学術叢書1、仁済大学校加耶文化研究所

¹²⁹ 大澤正己、1997、「弥生時代の鉄器の動向—金属学的見地からのアプローチ」『東日本における鉄器文化の

説¹³⁰が提起されている。これはこの時期の鉄素材を生産する製錬遺跡が韓半島で確認されていなかった状況下での議論である。だが、近年泗川靑島遺跡で出土した鉄滓の分析結果、溶解炉のslagであることが明らかになり¹³¹、華城旗安里遺跡で炒鋼の生産が行われていた可能性があり¹³²、中国および韓半島から日本列島への鉄素材流入が同時に展開されていた可能性が論議されている。

第2節 青銅器、鉄器時代の遺物の交流と墓制の様相

1. 青銅器、鉄器遺物の交流様相

韓半島と日本列島の青銅器は、その初期は墓の副葬遺物として大部分出土している。これら遺物の副葬は地域別、時期別に様相を異にするが、日本の場合、この時期の最高支配層の墓と考えられている九州の佐賀県宇木汲田12号墳、積石木棺墓の吉武高木3号遺跡から銅鏡、鉄剣、銅矛などが出土し、韓半島の最上級墓の例と類似した遺物層に分類されている¹³³。とりわけ、吉武高木3号墳は、日本に土着した甕棺墓ではなく、韓国系の積石木棺墓であり¹³⁴、この遺跡を残した集団は、韓国系の青銅器を製作した日本の初期鎔范と韓国系無文土器が同じ遺跡から共伴した事実を考慮すると、青銅器の製作集団を伴った韓半島南部地域の移住民集団であったとみられる¹³⁵。

一方、韓半島の青銅器は主に墓の副葬品として、日本列島では初期の副葬品形式から次第に埋納祭器としてその多くが発見されており、副葬と埋納という様相の変化がみられるが、同一の系統で変化していくという様相を持つ点で器種や形式を中心に検討されている¹³⁶。

武器の場合、銅剣、銅矛、銅戈が最も代表的であるが、剣は柄が別途装着される別鑄式で剣身には峰があり、韓国では琵琶形—中間型—細形—変形と変化し、日本では中細形—中広形—平形と変化する。このような形式は銅矛や銅戈も同様であり、韓半島から日本列島に移動しながら時間の経過とともに次第に大型化、非実用化して武器形祭器へと変化する¹³⁷。とりわけ、韓半島南部地域で出土した琵琶形銅剣は峰を研磨していない点で実用ではない儀器と考えられ¹³⁸、その形状も遼西地域のものに類似することが指摘されている¹³⁹。

韓半島と日本列島に共通して出土する鉄器文化段階の代表的な武器は細形銅剣、細形銅矛、細形銅戈などである。とくに細形銅剣は韓国式に銅剣でも呼ばれるが、関連する文化¹⁴⁰が韓半島と日本列

收容と展開』第4回鉄器文化研究集会

¹³⁰ 李京華、1992、「試談日本九州早期鉄器來源問題」『華夏考古』第4期

¹³¹ 慶南考古学研究所、2006、『靑島 貝塚V』考察編

¹³² 畿甸文化財研究院、2003、「華城 發安里 마을유적·旗安里 製鉄遺蹟 現場説明会資料」

¹³³ 이청규、2007、「한일 靑銅器와 요시노가리 유적」『한일문화교류, 한반도와 일본규슈』、국립중앙박물관、pp.78-79

¹³⁴ 福岡市教育委員会、1986『吉武高木—弥生時代埋藏遺跡の調査概要』、福岡市埋藏文化財調査報告書 143

¹³⁵ 이청규、2008、前掲書、p.80

¹³⁶ 이청규、2003、「한일靑銅器의 비교」『한국문화사상대계』4、영남대학교 민족문화연구소

¹³⁷ 이청규、2008、前掲書

¹³⁸ 이상수、2007、『요시노가리로 가는길, 요시노가리—일본속의 고대한국』、p.272

¹³⁹ 국립김해박물관、2003、『弁辰韓의 黎明 —점토대토기의 등장—』

¹⁴⁰ 細形銅剣は、独特の遺物の組合せを示している。すなわち、銅銚、銅戈、三角形石鏃の武器類、銅斧、銅鑿などの工具類、防牌形銅器、劍把形銅器、喇叭形銅器の異形銅器、粗文鏡、精文鏡の多乳鏡、八珠鈴、双頭鈴、組合式双頭鈴、竿頭鈴などの儀器類、曲玉、冠玉の玉類、粘土帶土器、黒土に代表される土器がその特徴で

島に分布し、韓日間の文化交流の様相をよく示している。日本列島における細形銅剣文化関連の遺跡は40カ所ほどあり、九州の北部地域を中心に列島の西部に分布し¹⁴¹、百数十点の細形銅剣や細形銅戈、細形銅矛がそれぞれ30余点、さらに鋳型も出土している¹⁴²。これらの武器形青銅器の日本列島における鋳造時点は3種とも弥生中期前半に始まっており、有明海沿岸地域に集中して現れている¹⁴³。また、武器形以外の鉦、銅鐸なども同時期に鋳造されるようになると考えられる。このような武器と製文鏡、銅鉞、石製曲玉、管玉、小玉などが共伴しているが、日本列島の細形銅剣文化は鉄器を伴わない特徴的な中細形化が進行し、中広形、広形へと儀器化する特性を持っている。紀元前後には金海地域を中心に発展した変形細形銅剣文化が流入している。

日本列島の細形銅剣は剣身が18-36cmで、26-32cmのものが80%以上を占めており、韓半島の様相と差がない。しかし、日本列島の細形銅剣は15種類の形式が想定されているが、韓半島と共通する形式は6種類であり、日本列島における独自化の現象を示している¹⁴⁴。これは細形銅剣の儀器化の現象を示すものであり、韓日青銅器文化の発展の特性を窺わせる内容である。

一方、韓半島に出土している儀器は、多鈕鏡、銅鈴、異形銅器、銅鐸などであり、これらのうち銅鏡や銅鐸が韓半島や日本列島で儀器として共通した機能を担っていた。祭祀行為を通じて青銅器を埋納する儀礼や関連する遺跡は韓半島にも存在した可能性は推測されているが¹⁴⁵、日本地域では紀元前1世紀から相当な遺跡が確認されている。この時期は日本で青銅器が本格的に製作されるようになる時期であり、中細形段階の大型化した銅矛、銅戈の埋納が始まる時期である。また埋納の様相をみると、辟邪としての意味を持つ武器形祭器¹⁴⁶や神を迎える意味を持つ銅鐸が儀器用に製作され埋納されている。とくに、銅鐸の場合、馬韓社会にみられた蘇塗の大木に鼓や鈴をかける儀式行為と関連する様相として注目される。

また、日本列島では地域的に畿内地域を中心とした銅鐸文化圏と九州を中心とした銅矛、銅剣文化圏に大別して説明されている¹⁴⁷。一方、2つの文化が重なる地域として中国地方と四国地方があり、とくに九州系の武器形祭器や近畿系の銅鐸形祭器の共伴が確認されている地域として、広島、島根両県がある¹⁴⁸。

とりわけ、近畿地方の弥生時代の祭器を代表する銅鐸の原型は韓国の小銅鐸、すなわち銅鈴に求

ある。

趙鎮先、2005、『細形銅剣文化의 研究』学研文化社、p.13

¹⁴¹ 趙鎮先、2005、『細形銅剣文化의 研究』学研文化社、pp.74-79 細形銅剣の関連遺跡の分布は北部九州の福岡県、佐賀県に集中し、瀬戸内海に沿って山口、広島、岡山、愛媛、高知、徳島を経て畿内地域に至り、東の名古屋でも出土している。

¹⁴² 吉田広、2001、『弥生時代の武器形青銅器』国立歴史民俗博物館 春成研究室

¹⁴³ 吉田広、2008、「日本列島における武器形青銅器の鋳造開始年代」『東アジア青銅器の系譜』新弥生時代のはじまり第3巻、雄山閣 pp.46-47

¹⁴⁴ 조진선、2005、前掲書、p.131

¹⁴⁵ 이상길、2000、「青銅器 埋納의 性格과 意味—馬山 加浦洞遺蹟 報告를 檢하여—」『한국고고학보』42. 琵琶形銅剣段階의 비과형동검단계의 清道礼田洞、星州草田面、開城海坪里など、細形銅剣段階の馬山加浦洞、山清白雲里、泗川馬島洞、靈岩新燕里、南海小草島、大邱晩村洞遺跡などがその性格を持つと考えられている。

¹⁴⁶ 吉田広編、2001、『弥生時代の武器形青銅器』考古学資料集 21

¹⁴⁷ 金関恕・佐原眞、1986「道具と技術」『弥生文化の研究』6、雄山閣

¹⁴⁸ 島根県教育委員会、1986『荒神谷遺跡発掘調査概報(2)—銅鐸、銅矛出土地』

められるが、家畜用の鈴から大韓海峡を越えて祭祀用の鐘と同じ機能へと変化するものと理解されてきた¹⁴⁹。しかし、伝来した時期に韓半島における牛馬飼育は発達していないことから、韓国の小銅鐸が祭祀用具であり、それが日本列島に伝わったものと考えられるようになった¹⁵⁰。また、日本の銅鐸と関連する銅鈴は2つ1組で忠南地域から銅劍、多鈕鏡とセットをなして出土し、シャーマンと関連する祭具と考えられている¹⁵¹。これは銅鐸が日本列島において農耕祭具から政治的祭祀の象徴へと変化する様相の原型を示している。

一方、韓半島地域においては、金海良洞古墳群、金海内德里遺跡、大邱晩村洞遺跡、比山洞遺跡、固城東外洞貝塚などで弥生系青銅儀器として中広形銅矛、中広形銅戈、倣製鏡など九州地域の青銅器が発見されている。これは主に葬送儀礼用に輸入されたものと考えられている¹⁵²。

日本の弥生時代の鉄器の様相は斧、刀子、鑿などの工具類や劍、戈、矛、刀、鏃などの武器類に区別される¹⁵³。これらの遺物は韓半島に隣接する北部九州の福岡県曲り田遺跡の板状鉄斧、福岡県の今川遺跡の鉄鏃、熊本県斉藤山の鉄斧、北九州市の長行遺跡の鑄造鉄斧などが代表的である¹⁵⁴。しかし、日本の学界では鉄器が中国の戦国時代の燕で生産された鉄器が舶載されたものとみるのが一般的であり、その時期的な上限は紀元前4世紀を遡るものとし、弥生早期の上限年代と捉えられている¹⁵⁵。だが、最近の年代上限論では、これらの遺跡の遺物が再堆積したか、出土が不分明であることから問題を再提起して、その鉄器の存在時期を弥生文化の開始時点ではなく、中期以降と設定している¹⁵⁶。これらの遺跡で発見された鉄器の時期については、すでに韓国の学界において鉄器使用の始まりの上限を遡らせることに対する問題点が指摘されている¹⁵⁷。

2. 墓制の様相

青銅器を副葬する墓は、紀元前10世紀頃から紀元前1世紀まで中国東北地域、韓半島、日本列島西部にかけて出現する。墓の形式は、琵琶形銅劍段階の積石墓、石棺墓、石槨墓、支石墓があり、細形銅劍段階の積石木槨墓、甕棺墓などがある¹⁵⁸。

青銅器副葬の様相は、中国東北地方では紀元前8-4世紀の琵琶形銅劍段階、韓半島では紀元前3世紀—紀元後1世紀頃の細形銅劍段階、日本列島では紀元前2世紀から紀元後1世紀頃に集中すると考えられている。しかし、琵琶形銅劍段階の墓制様式は石槨墓や木槨墓であるが、これに対して細形銅劍段階では積石木槨墓であることが注目される。

¹⁴⁹ 佐原眞、1979、『銅鐸』、日本の原始美術7、p.48-49

¹⁵⁰ 佐原眞、1987、「家畜のベルから祭りのベルへ」『古代出雲荒神谷の謎に挑む』角川書店、p.249-253

¹⁵¹ 春成秀爾、2008、「銅鐸の系譜」『東アジア青銅器の系譜』雄山閣、p.68

¹⁵² 岩永省三、2002、「青銅武器儀器化の比較研究」、西谷正編、『朝鮮半島考古学論叢』すずさわ書店； 이상길、2000、『青銅器時代の례에 관한 고고학적 연구』、대구효성카톨릭대학박사논문

¹⁵³ 이남규、2002、「日本 古代 鉄器文化의 形成—弥生時代를 中心으로—」『강좌 한국고대사—문화의 승용과 진과』9、pp.197-215

¹⁵⁴ 정한덕、2002、前掲書、p.204

¹⁵⁵ 橋口達也、1979、「甕棺副葬品からみた弥生時代実年代論」『九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』xxxix 中巻、福岡県教育委員会

¹⁵⁶ 春成秀爾、2008、「青銅器と弥生時代の年代」『東アジア青銅器の系譜』雄山閣、p.4

¹⁵⁷ 이남규、2002、前掲書、pp.191-194

¹⁵⁸ 이정규、2007、「한일 청동기와 요시노가리 유적」『요시노가리—일본속의 고대한국』pp.78-79

このような墓制の様相において、韓半島と日本列島に共通して登場する墓制のなかで、日本の支石墓はその系譜を韓半島に持ち、韓半島の支石墓のなかでも碁盤式の支石墓を主体とし、蓋石式支石墓も存在する点が共通の立場として提示されている¹⁵⁹。日本の支石墓は弥生時代早期から中期時代に編年される遺跡であり、日本列島のなかでも九州地域に限定的に現れ、主に西北部の福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県に集中している。

その特徴は、分布様相から韓半島から伝わったものであるが、対馬島・壱岐島には確認されず、日本の弥生時代の中心であった福岡平野でも初期の支石墓は見られない点にある。しかし、福岡平野周辺の佐賀県や長崎県に多数の支石墓が分布し、支石墓の下部様相も異なることが多いという特徴を持つ¹⁶⁰。このような状況によって、支石墓の系譜を韓半島南部とし、日本で初めて出現した地域を玄界灘沿岸とみる見解¹⁶¹や、その起源を全羅南道と見て出現地域を長崎県中心の西九州と見る見解などが提示¹⁶²されている。

しかし、日本の学界では支石墓の受容段階において、下部構造の長さが短いことや、支石墓内部の主体が土壇や木棺、石棺、甕棺など多様な形態を持つことから、日本に土着していた縄文人が主体的に受容し、変容したことを強調している¹⁶³。また支石墓で発見された人骨が縄文人かもしくはその系譜につながる者であることを挙げて、そうした見解をさらに強調している¹⁶⁴。しかし、韓半島の支石墓でも下部構造の長さが短く様々な形態があるため、これを基準にして日本の変容¹⁶⁵を論じることはできず、韓半島人の形質的特性が確定しない状況において支石墓の人骨の性格を単純に縄文人と特定することもできないという指摘¹⁶⁶をふまえれば、日本学界のこうした解釈は慎重を要する。むしろ、この問題は支石墓が農耕社会の記念物として、集落、生産施設および耕作地などとともに一定の空間的単位を占有するという意味を持つものであったことを想起すべきであろう¹⁶⁷。すなわち、支石墓は長期的に儀礼を繰り返す、血縁的紐帯と一定の耕作地と領域における日常生活、記念物を中心とした儀礼遂行の求心点であったという点で¹⁶⁸、これは農耕社会を新しく日本列島に伝えた集団の象徴物として考えなければならぬことを示している。

一方、北部九州の弥生時代の墓制として、弥生時代前期後半から後期後半までの大型土器を使用した甕棺墓、土壇墓、石棺墓などの墓制が盛行した。これらの墳墓から出土した人骨の場合、北部九州の北部地域(佐賀平野、福岡平野)の甕棺墓出土人骨は、渡来形の弥生人と考えられ、西北九州(唐津平野、長崎県)の沿岸部の土壇墓、石棺墓から出土した人骨は身長が低く、韓半島文化を受容した縄文系の弥生人と考えられている¹⁶⁹。また吉野ヶ里遺跡の甕棺などで出土した300人の人骨に対する

¹⁵⁹ 森貞次郎、1969、「日本における初期の支石墓」『金載元博士回甲記念論叢』

¹⁶⁰ 吉門雅高、2003、「古代日本の支石墓」『晉州南江遺蹟과 古代日本』p.259

¹⁶¹ 森貞次郎、1969、前掲書

甲元眞之、1978、「西北九州支石墓の一考察」『熊本大学法文論叢』41

¹⁶² 西谷正、1997、『東アジアにおける支石墓の総合的研究』、九州大学文学部考古学研究室

¹⁶³ 本間元樹、1991、「支石墓と渡来人」『児嶋隆人先生喜寿記念論集 古文化論叢』

¹⁶⁴ 橋口達也、1995、「墓制の変化(一) 北部九州—支石墓と大形甕棺の登場—」『弥生文化の成立』角川書店

¹⁶⁵ 春成秀爾、1991、『弥生時代の始まり』東京大学出版会

¹⁶⁶ 인제대학교 가야문화연구소편、2003、「綜合討論」『晉州 南江遺蹟과 古代日本』pp.374-376

¹⁶⁷ 李相吉、2000、『青銅器時代 儀禮에 관한 考古学的 研究』대구효성가톨릭대학교 박사논문

¹⁶⁸ 李盛周、2007、『青銅器-鉄器時代 社會變動論』、学研文化社、p.100

¹⁶⁹ 内藤芳篤、1971、「西北九州出土の弥生時代人骨」『人類学雑誌』79

分析では、身長が高く、面長の渡来形人骨の特徴を持つことが指摘されている¹⁷⁰。またこれらの遺跡から離れた海岸線地域の遺跡では長身の渡来形人骨や短身の縄文人骨が混在するとされており、地域ごとに偏差があったことが窺われ、佐賀平野を中心に有明海沿岸北部に韓半島の渡来人が集中したと考えられている¹⁷¹。一方、甕棺墓の場合、無文土器時代の中期から後期の甕棺墓には合口式もあるが、成人用に見合う大きさのものが存在しないという点から、九州の成人用甕棺墓は韓半島の甕棺墓の系譜を持ちながらも、北部九州で独自に発展した葬法である可能性も提起されている¹⁷²。

第3章 古朝鮮・三韓・三国初期の倭との交流

第1節 古朝鮮時代の日本列島との交流

1. 古朝鮮時代の倭との関係

中国の文献において初めて「朝鮮」が登場するのは、紀元前7世紀頃に書かれた『管子』にみえる齊との交易関連の記事である¹⁷³。

A-1) 桓公問 管子曰 吾聞海内玉弊有七筴 可得而聞乎 管子對曰 … 燕之茲山白金一筴也 發朝鮮之文皮一筴也(『管子』23 揆道)

上の史料A-1にみられるように古朝鮮と中原勢力との記録に表れた交流の様相は、春秋時代のもので考えられる¹⁷⁴。また、これに続く史料によれば、戦国時代に燕との隣接性が浮かび上がってくる。

A-2) 朝鮮在列陽東 海北山南 列陽屬燕(『山海經』海内北經)

A-3) 蘇秦…説燕文侯曰 燕東有朝鮮遼東(『戦国策』燕策)

上記の史料では燕文侯(紀元前361-333)時代の燕の東方に存在した朝鮮について言及している。このように朝鮮は燕と地理的に近い地として特徴づけられており、「遼東」が同時に存在した地名として登場している。

¹⁷⁰ 松下孝幸、1994、『日本人と弥生人』、祥傳社

¹⁷¹ 七田忠昭、2008、「요시노가리유적 吉野ケ里遺跡」『한일문화교류, 한반도와 일본 규슈』국립중앙박물관, p.110

¹⁷² 七田忠昭、2008、상계논문, p.111

¹⁷³ 『管子』は春秋時代の管仲の著述と伝えられているが、戦国時代の編纂と考えられる。また『管子』輕重篇はさらに後代の記録と見られるが、この内容は戦国時代以前からの伝承が戦国時代に整理されたものと考えられる。胡家聰、1994、「再論『管子 輕重』不作于漢代而作于戰國—兼論考證的類比法之或然性」『社會科学戰線』1994年3期 pp.139-143; 송호정、2003、『한국고대사속의 고조선사』푸른역사, pp.45-46。

¹⁷⁴ 桓公曰 四夷不服 恐其逆政 游於天下 而傷寡人……發朝鮮不朝 請文皮瑱服而以爲幣乎……一豹之皮容金而金也 然後八千里之發朝鮮可得而朝也(『管子』24 輕重甲)。『管子』の記録の年代性については、一部議論されているが、春秋時代と考えられる。

したがって、先秦の文献に登場する朝鮮の歴史的存在に関する認識は少なくとも紀元前7世紀頃、春秋時代の中国と交易を展開しており、戦国時代の文献においては、より具体的に燕との地域的隣接性が強調され、その関連地名として「列陽」「遼東」などが登場する。

一方、この時期の古朝鮮と倭との関係を直接示す史料は確認されていないが、それを推定しうる次のような史料が注目される。

A-4) 朝鮮在列陽東海北山南列陽屬燕 蓋國在鉅燕南倭北 倭屬燕(『山海經』12・海内北經・蓋国)

上記A-4) 史料は、中国史料における倭について最初の記録であり、倭とその周辺の地理を紹介している。従来の日本の学界では、これらの史料および中国の古典に登場する倭、倭人関係の記録を根拠にして、倭人が日本列島だけでなく、韓半島および中国沿岸地域など分布していたと拡大解釈することもあった¹⁷⁵。これについては、倭と関連する記事が多くは交流関連の記事であり、これを拡大解釈したり¹⁷⁶、史料の誤伝にともなう解釈の誤解があったことが指摘されている¹⁷⁷。しかし、これらの史料に表れた地理的状況は、古朝鮮と倭との交流を前提として深められた知識に基づいて記録であったと考えられる。まず、鉅燕という表現は戦国時代の燕の全盛期を言い表したものであり、紀元前3世紀中葉の昭王代の威勢のことであり¹⁷⁸、紀元前4世紀頃の燕と古朝鮮の戦争過程において、古朝鮮に対する攻略を通じて、遼東半島の天山山脈を境界線とする領域を確保するという情勢¹⁷⁹のなかで、古朝鮮が倭との交流を通じて持っていた倭についての地理的情報を手に入れたものと考えられる。

また、蓋国の地理的関係を説明したうえで、鉅燕の南に蓋国が、そして倭の北に蓋国があり、倭が燕に属していたという内容は、倭の位置が具体的に蓋国の南に位置していたことを窺わせる。だが、蓋国は清代の学者であった郝懿行が『山海經箋疏』のなかで『三国志』高句麗伝に登場する蓋馬との関連性を捉えて¹⁸⁰以来、これに沿って理解されている。こうしたことから、燕—古朝鮮—蓋国—倭とつながる交流体系が存在したこと知られるのである。

すなわち、紀元前4～3世紀頃、燕は昭王代に古朝鮮との戦争を通じて広大な領域を確保し、その過程において、古朝鮮と蓋国に対する情報を入手し、すでに古朝鮮や蓋国とつながりを持っていた倭についての地理的な情報をも手に入れたと考えられる。

¹⁷⁵⁾ 江上波夫、1984、「東アジアにおける倭人の起源と活動」『江上波夫著作集』8、平凡社
井上秀雄、1975、「中国古典の朝鮮と倭」、國分直一編『倭と倭人の世界』、毎日新聞社
國分直一、1980、「倭と倭種の世界」『東シナ海の道—倭と倭種の世界—』、法政大学出版部；富田仁編、1992、『事典外国人の見た日本』

¹⁷⁶⁾ 山尾幸久、1979、「日本書紀の中の朝鮮」『共同研究 日本と朝鮮の古代史』、三省堂；1982、「朝鮮の兩漢の郡県と倭人」『立命館文学』439-441期

¹⁷⁷⁾ 沈仁安著、藤田友治、藤田美代子譯、2003『中國からみた日本の古代』ミネルヴァ書房、pp.56-63
とりわけ、檀石槐に関連する倭人の記録は、『三国志』の記録の汗国記録の歪曲であることを確認し、倭人の北方存在説を比定している。

¹⁷⁸⁾ 조법중、2006、『고조선고구려사연구』신서원、pp.230-232

¹⁷⁹⁾ 서영수、2007、「고조선의 발전과정과 강역의 변동」『고조선의 역사를 찾아서』、학연문화사、pp.42-44

¹⁸⁰⁾ (三国志) 魏志東夷傳云“東沃沮在高句麗蓋馬大山之東”後漢書東夷傳同。李賢注云：『蓋馬、縣名、屬玄菟郡。』今案蓋馬疑本蓋國地。」

ところで、ここで注目されるのは、このとき手に入れた情報に基づいて『山海経』に「倭属燕」と書き記した点である。ここにみえる「属」という表現は、政治的隷属や地理的連続とは異なる往来や交易を示したものと理解されている¹⁸¹。しかし、古朝鮮を攻略した燕および秦の状況を表現した「属」について一瞥すれば、一部の領域を侵犯して、自国の領域とするか(史料B-1)、政治的服属を約束したが、直接入朝しなかった状況(史料B-2、3)を示した内容になっている。

B-1) 自始全燕時嘗略属眞番 朝鮮爲置吏 築鄣塞(『史記』115・列伝55・朝鮮列伝)¹⁸²

B-2) 秦并天下 使蒙恬築長城 到遼東・時朝鮮王否立 畏秦襲之 略服属秦 不肯朝會(『史記』115・列伝55・朝鮮列伝)

B-3) 歷至孝文即位、將軍陳武等議曰南越、朝鮮自全秦時内屬爲臣子、後且擁兵阻驪、選蠕觀望(『史記』25・律書3)

したがって、「倭属燕」という表現は、燕によって誇張された可能性が高いが、倭が古朝鮮にある程度包括されていた政治勢力として認識されていたために、古朝鮮を略属したと表現した燕が「古朝鮮に属した存在と認識された倭」を結びつけて「倭属燕」という象徴的な表現が出現した可能性があると考えられる。

それゆえ、倭と中国との最初の交流記事として言及されてきた『山海経』の内容は、実は古朝鮮、蓋国と倭のあいだに保たれていた政治的隷属認識および文化的交流に基づいた伝聞や関連知識、および文物の交流などによって出現したものとみられる。そして、これらの諸国のあいだに交流があったとすれば、古朝鮮および蓋国を通じた交流であり、これらの中継的役割があったことを確認させてくれる。このような内容は衛満朝鮮時代の史料においてさらに具体化される。

2. 衛満朝鮮時代の対外交流

衛満朝鮮に関連する考古学的資料は、細形銅剣文化と特徴付けられる¹⁸³。衛満朝鮮時代の紀元前2世紀の韓半島から日本列島の壱岐を経て北九州地域まで衛満朝鮮系統の細形銅剣文化と韓半島南部地域の無文土器文化が伝わった¹⁸⁴。このような状況は先に検討した遺物の伝来様相で具体的に示したので、本節ではこの状況を確認する文献資料の検討を行なう。

衛満朝鮮時代の衛満は漢との関係を通して発達した武器と技術を手に入れ、周辺勢力を掌握していた。

¹⁸¹ 沈仁安著、藤田友治、藤田美代子譯、2003、『中國からみた日本の古代』ミネルヴァ書房、pp.56-57

¹⁸² 燕による古朝鮮攻略の内容を示す史料をみれば、領域を確保したことを示している。「燕乃遣將秦開攻其西方 取地二千餘里 至滿番汗爲界 朝鮮遂弱」(『三國志』韓傳 引用『魏略』)・「燕襲走東胡 僻地千里度遼東而攻朝鮮」(『鹽鉄論』8 伐攻篇)。

¹⁸³ 이청규, 2007, 「청동기를 통해 본 고조선과 주변사회」『고조선의 역사를 찾아서』, 고조선사연구회, 동북아역사재단, pp.105-108

¹⁸⁴ 武末純一, 2002, 「일본 구주 및 근기지역의 한국계 유물」『古代 東亞細亞와 三韓, 三國의 交涉』, 복천박물관 pp.123-126

이재석, 2007, 「고대 구주 해안도서와 동아시아의 교류」『구주 해안도서와 동아시아』pp.158-159

C-1) 會孝惠、高后時天下初定、遼東太守卽約滿爲外臣、保塞外蠻夷、無使盜邊 諸蠻夷君長欲入見天子 勿得禁止 以聞 上許之 以故滿得兵威財物侵降其旁小邑 眞番 臨屯皆來服屬 方數千里.....傳子至孫右渠、所誘漢亡人滋多、又未嘗入見 眞番旁衆國欲上書見天子、又擁闕不通

(『史記』115・朝鮮列伝55)

上記の史料において注目されるのは、衛満朝鮮は漢と周辺の蠻夷と表現された勢力との中継的役割を担いつつ¹⁸⁵、これを統制した点である。とりわけ、「眞番旁衆國欲上書見天子、又擁闕不通」とあるのは、衛満朝鮮は単純に周辺勢力の漢との交流を中継しただけではなく、これを統制し調整したことを窺わせる。一方、この時期以前から周辺勢力、とりわけ辰国と表記された南の政治勢力とは海路および陸路を通じて緊密なつながりをもっていた。

D-1) 初、朝鮮王準爲衛満所破、乃將其餘衆數千人走入海、攻馬韓、破之、自立爲韓王。準後滅絶、馬韓人復自立爲辰王。(『後漢書』89・東夷伝75・三韓)

D-2) 侯準既僭號稱王、爲燕亡人衛満所攻奪、將其左右宮人走入海、居韓地、自號韓王。其後絶滅、今韓人猶有奉其祭祀者。漢時屬樂浪郡、四時朝謁。(『三国志』30魏書30・魏書30・東夷韓)

D-3) 魏略曰其子及親留在國者、因冒姓韓氏。準王海中、不與朝鮮相往來。(『三国志』30・魏書30・東夷韓)

D-4) 魏略曰 初 右渠未破時 朝鮮相歷谿卿 以諫右渠不用 東之辰國 時民隨出居者二千餘戸 亦與朝鮮貢蕃不相往來(『三国志』30・魏書30・東夷韓)

史料D-1)によれば、衛満が準王を攻撃するや、準王は左右宮人(餘衆數千人)を率いて海路によって韓(馬韓)地域に逃れ、その地域の王を自任したという。また、史料D-3)では、準王が海中にあって朝鮮と往来しなかった事実が特記されている。この事実は、古朝鮮時代にすでにかなり活発な海上交流が韓地域と展開しており、その規模も数千名が同時に移動するような規模であったことを示している。また、準王の避難地域がこうした海上交流の中間拠点であり、古朝鮮との交流を中継して、統制可能な地域拠点であったことを窺わせる。これは古朝鮮時代の蓋国とむすびついた倭との実際の交流様相を類推させる。また、史料D-4)は、陸路を通じて衛満朝鮮以前およびその初期からすでに「辰国に行った歴谿卿が朝鮮と貢蕃を不相往來した」という状況は、すでにその前から維持されていた交流関係を利用して、歴谿卿が辰国に政治的に亡命して、その関係を維持しなかったことを伝えている。

3. 衛満朝鮮時代の倭との交流

倭と中国との公的な接触は、漢武帝の衛満朝鮮攻略以降に本格的に始まったことが次の史料Eより確認される。

¹⁸⁵⁾ 崔夢龍、1985、「古代國家成長과 貿易; 衛満朝鮮의 例」『韓國古代의 國家와 社會』역사학회

E-1) 玄菟樂浪、武帝時置、皆朝鮮濊貉句驪蠻夷、……樂浪海中有倭人、分爲百餘國、以歲時來獻見云。(『漢書』志28下・地理志第8下)

E-2) 秦并六國、其淮泗夷皆散爲民戶。陳涉起兵、天下崩潰、燕人衛滿避地朝鮮、因王其國。百有餘歲、武帝滅之、於是東夷始通上京。王莽篡位、貊人寇邊。建武(25-55)之初、復來朝貢。

E-3) 時遼東太守祭彤威讐北方、聲行海表、於是濊貊倭韓萬里朝獻、故章和已後、使聘流通。(『後漢書』85・東夷伝75・倭)

E-4) 倭人在帶方東南大海之中、依山島爲國邑。舊百餘國、漢時有朝見者、今使譯所通三十國。(『三国志』30・魏書30・東夷・倭)

E-5) 倭在韓東南大海中、依山嶋爲居、凡百餘國。自武帝滅朝鮮、使驛通於漢者三十許國(『後漢書』85・東夷伝75・倭)

上記の史料E-1)は、倭についての具体的な様子が中国の記録に表れた最初の記録である。しかし、倭が中国社会に具体的に紹介されたのは、史料E-2)に示されるように、前漢武帝の衛滿朝鮮攻略以降、倭の存在を知るようになったという点である。すなわち、『漢書』にみえる「樂浪海中有倭人 分爲百餘國、以歲時來獻見云」という表現は、樂浪と玄菟に対する言及以降、倭に対する理解が生まれたことを窺わせる。だが、これは先に検討したように、衛滿朝鮮以前から倭との関係があったことを示すものである。これは、漢-倭の交流が既存の交流網に対する知識とネットワーク構築なくして成り立ち得ない様相であるという点からも頷ける。

とりわけ、樂浪海中という表現は、D-4)の準王海中という表現につながるものであり、古朝鮮と海でつながる倭との関連性がそれまでの状況を継承したものであったことを窺わせるものである。

一方、E-5)にみえるのは、武帝滅朝鮮という歴史的イベントが以降、漢時有朝見者があったという事実を示している。こうした古朝鮮以来の倭との交流体系とその内容は、衛滿朝鮮の崩壊により交流の代わり統制されるようになった樂浪をはじめとする郡県勢力が既存の交流網を活用しただけでなく、関連する政治勢力の援助と協力を通じて交流を行ったものとみられる。このような事実は、前章で検討した靺島・金海など南海岸一帯に分布する中国系遺物が発見される遺跡から倭系の遺物が共伴することによって確認できる。しかし、この交流の中継過程でこれまで重視されてこなかった内容が「重詔」と表現された交流の中継および調停の役割を担った者の存在である。これについては三韓時代の倭との交流を通して論じてみようと思う。

第2節 三韓・三国初期の倭との交流

1. 東夷地域における重詔外交

古朝鮮および衛滿朝鮮時代より維持されてきた周辺勢力、とりわけ倭との交流は漢郡県の介入以後、さらに具体的に把握されるようになった。

まず、中国勢力と三韓勢力との関係は、後漢時代の樂浪を中心に展開するが、劉秀光武帝の後漢樹立(25年)以降、中国を再統一し(36年)安定を回復すると、周辺勢力との一連の外交関係を再び確

立した¹⁸⁶。

そうしたなか後漢が倭の奴国王に金印を下賜したことについて、これを後漢が倭の奴国と協力して韓の勢力を統制しようとしたという遠交近攻策であったとみる見解もあるが¹⁸⁷、これは当時の状況と後漢の政策とはまったく無関係であったという点から否定されている¹⁸⁸。むしろ、倭と中国との交流の様相をみれば、交流を仲介していた韓の役割と仲裁的機能に注目すべきであると考えられる。すなわち、倭の中国との交流は中間情報および交流の仲裁役を担った韓と称される勢力との関係が不可欠であったと考えられる。

中国は周辺勢力との関係において、言語が通じない遠地との交流には通訳を前提として交易を展開した。その様子は、『史記』を書いた司馬遷の自序に、これらとの交流が重訳を通じて行われ、東夷社会がその対象のひとつであったことが窺われる。

F-1) 太史公曰……漢興以來、至明天子、獲符瑞、封禪、改正朔、易服色、受命於穆清、澤流罔極、海外殊俗、重譯款塞、請來獻見者、不可勝道。(『史記』列傳130・太史公自序70)

F-2) 書稱 漸于海、西被于流沙。其九服之制、可得而言也。然荒域之外、重譯而至、非足跡車軌所及、未有知其國俗殊方者也。(『三国志』30・魏書30・東夷)

重訳という表現は『史記正義』に「更訳其言」とあるように¹⁸⁹、「度重なる通訳」、すなわち中国(A)とすでに交流体系が形成され、言語疎通体制をもった国家や種族(B1)によってその国家(B2)と交流を結んでいた他の国家や種族(C)がこれらの通訳などの協力を通じて中国との交流が行われたことを示している。(A⇄B1⇄B2⇄C)

ところで、このような重訳国家間の様相(B2⇄C)がいかなるものであったのかに対する具体的な内容は、東夷地域で中国との重訳を担当した高句麗と百済が周辺国家との関係から類推しうる。

まず、肅慎が高句麗による重訳を通じて中国と交流していたことを示すのは次の史料である。

F-3) 景元三年(262 中川王15)……夏四月、遼東郡言肅慎國遣使重譯入貢、獻其國弓三十張、長三尺五寸、楛矢長一尺八寸、石弩三百枚、皮骨鐵雜鎧二十領、貂皮四百枚。(『三国志』4・魏書43 少帝・陳留王奐)

F-4) 三年(459、長壽王47)……十一月己巳、高麗國遣使獻方物。肅慎國重譯獻楛矢石弩。西域獻舞馬(『宋書』6・本紀6・孝武帝)

F-5) 孝武帝大明三年(459、長壽王47)十一月己巳、肅慎氏獻楛矢石弩、高麗國譯而至。(『宋書』29・志29・符瑞下)

¹⁸⁶ すなわち、32年高句麗遣使奉貢、47年楽浪帰服、44年韓国人が楽浪に帰服、49年烏桓大人来朝、扶餘王貢獻、南匈奴称臣、52年北匈奴遣使奉獻、54年鮮卑大人帰服、57年倭奴国王遣使奉貢と展開した。

¹⁸⁷ 井上光貞、1963、『日本歴史 1 神話から歴史へ』中央公論社
王金林、1986、『古代の日本—邪馬台国を中心として』六興出版

¹⁸⁸ 沈仁安著、藤田友治、藤田美代子譯、2003、『中国からみた日本の古代』ミネルヴァ書房、pp.84-86

¹⁸⁹ 史記正義 重譯、更譯其言也。

史料F-4・5)にみえるように肅慎が中国と交流するには、重訳の手続きを踏まなければならない、この重訳のために、両者を仲介する勢力として高句麗が存在したことが窺われる。とくに、F-4)史料では、高句麗が宋に使者を遣わすにあたり、肅慎国が重訳を通じて[宋に]至ったことを示しているが、高句麗の重訳が明確に言及されているわけではない。しかし、F-5)に肅慎の内朝が「高句麗訖而至」とあるように、高句麗の重訳が明治されている。また、F-3)において肅慎が遼東郡と重訳を通じて交流したことも、後述する史料を勘案すれば、高句麗による重訳があった可能性が高い。

他方、中原王朝⇄高句麗⇄肅慎間で展開した重訳外交において、高句麗が肅慎を中国に紹介した理由は、すでに展開していた高句麗と肅慎の政治的関係によって確認される。すなわち、太祖王69年(121)の肅慎の来献¹⁹⁰、西川王11年(280)肅慎を攻略し、附庸したという記録¹⁹¹、また広開土王碑に登場する息慎、すなわち肅慎が¹⁹²高句麗に朝貢したという事実などをみれば、重訳を引き受けた国家は被重訳勢力に対して、政治的に隷属的關係をもっていた。すなわち、F-4・5)が示す重訳国家の位相と役割が朝貢および附庸関係のもとに形成されたものであったことを確認する。

以上の内容を整理すれば、肅慎が高句麗の協力を得て、重訳という外交手続きを経て中国と交流した事実は、中国とすでに外交関係を結んでいた高句麗が前提となって、この高句麗と肅慎との朝貢および附庸関係という副次的交流関係を前提に高句麗が肅慎と中原王朝との間を取り持ったことを示している。

一方、このような事実は、百済が周辺の小国を中国との外交関係において、重訳を通じて結びつけたことから改めて確認できる。

G-1) 百濟舊來夷 馬韓之屬 ... 普通二年 其王餘隆遣使奉表云.... 旁小國有叛波. 卓. 多羅. 前羅. 新羅. 止迷麻連. 上己文. 下枕羅等附之..... (『梁職貢図』)

G-2) 其俗呼城曰健牟羅、其邑在內曰啄評、在外曰邑勒、亦中國之言郡縣也. …… 語言待百濟而後通焉. (『梁書』54・列傳48・東夷新羅)

史料G-1・2)にみえる内容は、梁と新羅の交流は、百済を通じて展開したことを示している。これはG-2)にみえるように、「諸国の」外交状態が百済によって統制されていた事実は、外交関係を維持できる力量と政治的上下関係などによって表れた重訳的性格を窺わせる。これは新羅が百済の附庸される存在であったことを示す次の史料によっても確認される。

G-3) 新羅者、..... 其國在百濟東南五千餘里. 其地東濱大海、南北與句驪、百濟接. 魏時曰新盧、宋時曰新羅、或曰斯羅. 其國小、不能自通使聘. 普通二年、王姓募名秦、始使使隨百濟奉獻方物. (『梁書』54・列傳48・東夷新羅)

¹⁹⁰ 六十九年 冬十月、王幸扶餘 祀太后廟。存問百姓窮困者、賜物有差。肅慎使來、獻紫狐子及白鷹、白馬、王宴勞以遣之 『三国史記』15・高句麗本紀3・太祖大王。

¹⁹¹ 十一年、冬十月、肅慎來侵。王於是、遣達賈往伐之 達賈出奇掩擊、拔檀盧城 殺酋長、遷六百餘家於扶餘南烏川、降部落六七所、以爲附庸。王大悅拜達賈爲安國君、知内外兵馬事、兼統梁貊肅慎諸部落。『三国史記』17・高句麗本紀5・西川王。

¹⁹² 盧泰敦、1992、「廣開土王陵碑」『譯註韓國古代金石文』1、韓國古代社會研究所編、p.26

上の史料にみられるように、新羅は小国であり、自ら使者を遣わして交聘できない状態にあり(其国小、不能自通使聘)、そのために百済に随って梁に初めて使者を送ったのである。

以上の高句麗—肅慎、百済—新羅の例によって確認できるように、重訳による中国との外交関係を形成した国家や勢力の状況は重訳を担当した国家と被重訳国家、および勢力の間には、附庸関係などの政治的上下関係が存在したのであり、そのなかで中国との外交関係が形成されたのである。

2. 三韓と倭との交流—文献の検討—

三韓と中国との交流に関する韓国学界の研究は、朝貢の形式を装った交易活動によって交易の担い手は富の蓄積と政治権力を伸長させたと考え¹⁹³、交易携帯と交易品および交易の推移など三韓の対外交渉に関する総合的な理解¹⁹⁴が深められてきた。

一方、衛満朝鮮の崩壊以降、中国と間との交流は、郡県が衛満朝鮮に代わる形で展開した。また、韓と倭との交流は、韓と倭との自体的交流とともに、中国郡県との交流を韓が中継する重訳的性格の交流が展開ものと考えられる。

しかし、韓と倭の交流の核心は次の史料に表れているように、鉄交易を中心に銅と織物などの交易であった¹⁹⁵。

H-1) 弁辰……國出鐵、韓濊倭皆從取之。諸市買皆用鐵、如中國用錢、又以供給二郡。(『三国志』30・魏書30・東夷・韓)

H-2) 國出鐵、濊、倭、馬韓並從市之。凡諸貿易、皆以鐵爲貨。(『後漢書』85・東夷列伝75・三韓)

上記の史料にみられるように、弁辰の鉄は韓・濊・倭および樂浪、帶方の2郡にまで供給されていたことが強調されている。このような鉄器交易および鉄器を活用した貿易は、活発な交流の様相を呈し、とりわけ倭と郡県をむすぶ途次にあった西南海岸の諸「韓国」、そのなかでも狗邪韓国が中継的役割を担ったものとみられる。一方、倭と中国郡県との交流は史料にみられるように、大同江流域から西海岸・南海岸を経て、洛東江流域にいたるルートであり¹⁹⁶、郡県と三韓、三韓と倭との鉄交易網を通じた交流に基づくものであった。

H-3) 倭人在帶方東南大海之中、依山島爲國邑。舊百餘國、漢時有朝見者、今使譯所通三十國。

¹⁹³ 李鍾旭、1986、「韓・倭의 政治勢力과 樂浪郡・帶方郡의 關係」『韓日古代文化의 諸問題』韓日文化交流基金、1~33; 1994『韓日古代文化의 連繫』(서울프레스) pp.215-237

¹⁹⁴ 李賢惠、1994、「三韓의 對外交渉體系」李基白先生古稀紀念韓國史學論叢刊行委員會編、『李基白先生古稀紀念 韓國史學論叢』上(一潮閣) pp.35-57; 1998『韓國古代의 生産과 交易』(一潮閣) pp.264-290

¹⁹⁵ 菅谷文則、1988、「古代の日本列島からの輸出品と東アジアの交易」『橿原考古學研究所論集』10(吉川弘文館) pp.307-316

駒井和愛、1972、『樂浪—漢文化の殘像』(中央公論社) 118

三韓地域と倭において同時に生産された縑布が重要な交易対象であった可能性が高い。

¹⁹⁶ 노중국、2002、「진변한의 정치사회구조와 그 운영」『진변한사연구』pp.273-274

從郡至倭、循海岸水行、歷韓國、乍南乍東、到其北岸狗邪韓國、七千餘里、始度一海、千餘里至對馬國(『三国志』30・魏書30・東夷・倭)

史料H-3)の「使駅通於漢者三十許国」という記事にみえる「使駅通」の文言より、重訳外交関係の様相が窺われる。ここでは駅は訳人を意味し¹⁹⁷⁾、このことから分かるように、漢と倭のつながりは、両者を結びつける訳人の存在によって成立した重訳外交であったことが注目される。これは高句麗が肅慎を、百済が新羅を中国に結びつけたのと同じく、倭も中間の重訳国家を通じて中国と交流していたことを示す内容である。

すなわち、漢語を話し、倭語を話す韓の訳人による重訳によって、交流が成り立っていたことを類推させる。こうした重訳の様相は、漢、後漢以降も行われ、中国の歴代王朝と倭との交流の相当期間で展開したことを窺わせる。そして、「使駅通於漢者三十許国」という史料にみえるように、100余国のうち30余国がこうした重訳外交を通じて韓との交流ネットワークと結びつく存在であった可能性が大きい。

ここで、中国勢力との交流に関与した訳人の存在とその重要性を伝える事例を挙げれば次のとおりである。

H-4) 魏略曰……至王莽地皇時(20-22)、廉斯鑿爲辰韓右渠帥、……其邑落、見田中驅雀男子一人、其語非韓人。問之、男子曰：〈我等漢人、名戸來、我等輩千五百人伐材木、爲韓所擊得、皆斷髮爲奴、積三年矣。〉鑿曰：〈我當降漢樂浪、汝欲去不〉戸來曰：〈可。〉鑿因將戸來出詣含資縣、縣言郡、郡即以鑿爲譯、從芴中乘大船入辰韓、逆取戸來。降伴輩尙得千人、其五百人已死。鑿時曉謂辰韓：〈汝還五百人。若不者、樂浪當遣萬兵乘船來擊汝。〉辰韓曰：〈五百人已死、我當出贖直耳。〉乃出辰韓萬五千人、弁韓布萬五千匹、鑿收取直還。郡表鑿功義、賜冠幘田宅、子孫數世(『三国志』30・魏書30・韓)

H-5) 部從事吳林以樂浪本統韓國、分割辰韓八國以與樂浪、吏譯轉有異同、臣智激韓忿、攻帶方郡崎離營。時太守弓遵樂浪太守劉茂興兵伐之、遵戰死、二郡遂滅韓(『三国志』30・魏書30・韓)

上記のH-4)において、王莽地皇時(20-22)に廉斯鑿が郡県と辰韓との通訳を行った事実を勘案すれば、訳人を通じた交流が重要であったことが窺える。これらの史料は、重訳がまだ直接的な通訳による政治外交的な交流の様子を窺わせるものであり、重訳はこうした状況下で設定されたものであったことが分かる。とりわけ、H-5)は魏の正始年間(240-248)に部從事吳林の意志が通訳の不手際によって(吏訳転有異同)、誤解を生じ、韓との衝突を招いた事件を伝えている。つまり、韓と漢の交流過程における通訳による交流の様相が大きな役割を占めていたことを窺わせる。

こうした中国—漢—倭をむすぶ重訳外交の様相は、とりわけ魏晋時代に浮き彫りになる。

I-1) 正始元年(240)春正月、東倭重譯納貢(『晋書』紀1・帝紀1・高祖宣帝懿)

¹⁹⁷⁾ 後漢書 標點校勘記 案 干誤謂驛當作譯 使譯 使則使者 譯則譯人。

I-2) 宣帝之平公孫氏也、其女王遣使至帶方朝見、其後貢聘不絶。及文帝作相、又數至。泰始初(266)、遣使重譯入貢。(『晋書』97・列伝67・倭人)

I-3) 魏明帝景初二年、司馬宣王之平公孫氏也、倭女王始遣大夫詣京都貢獻。魏以爲親魏倭王、假金印紫綬。齊王正始中、卑彌呼死、立其宗女臺輿爲王。魏略云：〈倭人自謂太伯之後。〉其後復立男王、並受中國爵命。晉武帝泰始初、遣使重譯入貢。『通典』16・辺防典185・辺防1・東夷上・倭

史料I-1)の状況は、曹魏が238年、公孫氏勢力を征服して東夷と接触し、倭との交流が行われたことを伝えている。とりわけ、魏は244年に高句麗の征伐以後、東夷計略に本格的に乗り出すが¹⁹⁸、攻略の背景とその目的は、曹魏の背後の安定を図り、呉・蜀との戦争に必要な物資を調達することにあつたと考えられる。さらに、呉との対立構造のなかで、高句麗、扶餘の動静がはっきりせず、韓が帶方郡を攻撃するという状況下における倭の女王国が魏に朝貢したという状況は、魏をして倭に対して金印賜与という恩恵と関心を抱かせることになつたと考えられる¹⁹⁹。しかし、記載された内容はあまりに粗略であり、混乱があり、当事者による伝聞や記録ではなく、中継者による間接的な伝聞記録であつたと考えられる²⁰⁰。このような状況を示すのは史料に登場する重訳による交流による結果であると考えられる。

後漢、魏、晋代までの中国と韓、倭の交流関係を示した表をみれば、韓は後漢、魏代お郡県と対立しており、倭は魏との朝貢関係が頻繁であつた。晋代には馬韓、辰韓の朝貢が12回、倭は266年の1例のみみえている。しかし、注目されるのは史料I-1、2、3)にみえるように倭の魏、晋との交流が重訳による入貢であるという点である。

¹⁹⁸⁾ 金容範、1986、「魏晋の 東北關係—秩序推移를 中心으로」(충남대학교 석사학위논문)
大庭脩、1996、「三・四世紀における遼東地域の動向」『古代中世における日中關係史の研究』(同朋舎出版)
pp.41-59

¹⁹⁹⁾ 井上秀雄、1978、「中國文獻朝鮮、韓、倭」『任那日本附倭』; 김기섭역、井上秀雄、1994、「중국문헌에 나타난 朝鮮、韓、倭에 대하여」『고대 한일관계사의 이해—왜』이론과 실천, pp.49-51

²⁰⁰⁾ 井上秀雄、1978、「中國文獻朝鮮、韓、倭」『任那日本附倭』; 김기섭역、井上秀雄、1994、「중국문헌에 나타난 朝鮮、韓、倭에 대하여」『고대 한일관계사의 이해—왜』이론과 실천, pp.48-49, 52-53

年代	年号	韓	倭
44	建武20年	東夷韓國人 樂浪來附	
57	建武中元2年		倭奴國朝貢、印綬下賜
107	永初元年		倭奴國 帥升 朝貢、生口献上
121	建光元年	馬韓が高句麗とともに玄菟城攻撃。	
122	延光元年	馬韓 夫餘、玄菟に撃破される	
238-9	景初2-3年	樂浪、帯方2郡復活 諸韓國2郡朝貢 辰韓8国分割統治提案 諸韓國が2軍と戦争	倭女王遣使朝貢 親魏倭王の称号、金印を授与
240	正始元		魏使答礼使節派遣
243	正始4		倭王朝貢
246	正始7	韓の数十国、郡に來降	
247	正始8		魏使到來
261	景元2	樂浪の外夷。韓の朝貢	
266	泰始2		倭人朝貢
277	咸寧3	馬韓來朝	
278	咸寧4	馬韓、内附を請う。	
280	太康元	馬韓・辰韓朝貢	
281	太康2	馬韓・辰韓朝貢	
282	太康3	馬韓の未朝貢国、來朝	
286	太康7	馬韓・辰韓朝貢	
287	太康8	馬韓來朝	
289	太康10	馬韓來朝	
290	永熙元	馬韓來朝	

ところで、重訳を担った国家は表によって確認しうるように使者の行路にあたる馬韓、辰韓と考えられる。また、先に重訳外交で確認した重訳国家と被重訳国家間の政治的上下関係を想定する余地があるものと考えられる。

とりわけ、次の史料には、公孫氏が帯方郡を設置して強勢を誇った韓濊を攻撃したのち、倭が服属したとある。

桓靈之末、韓濊疆盛、郡縣不能制、民多流入韓國。建安中、公孫康分屯有縣以南荒地爲帶方郡、遣公孫模張敞等收集遺民、興兵伐韓濊、舊民稍出、是後倭韓遂屬帶方。景初中、明帝密遣帶方太守劉昕樂浪太守鮮于嗣越海定二郡、諸韓國臣智加賜邑君印綬、其次與邑長。其俗好衣幘、下戸詣郡朝謁、皆假衣幘、自服印綬衣幘千有餘人。部從事吳林以樂浪本統韓國、分割辰韓八國以與樂浪、吏譯轉有異同、臣智激韓忿、攻帶方郡崎離營。時太守弓遵樂浪太守劉茂興兵伐之、遵戰死、二郡遂滅韓。（『三国志』魏書30・魏書30・東夷・韓）

順帝昇明二年、遣使上表曰：〈封國偏遠、作藩于外、自昔祖禰、躬擐甲冑、跋涉山川、不遑寧處。東征毛人五十五國、西服夷六十六國、渡平海北九十五國、王道融泰、廓土遐畿、累葉朝宗、不愆于歲。臣雖下愚、忝胤先緒、驅率所統、歸崇天極、道逕百濟、裝治船舫、而句驪無道、圖欲見吞、掠抄邊隸、虔劉不已、每致稽滯、以失良風。雖曰進路、或通或不（『宋書』列伝97・列伝57・

夷蛮・東夷・倭国)

3. 三韓と倭との交流—考古学的検討—

三韓と倭との交流は、古朝鮮およびそれに続く楽浪系遺物を通じて確認できる。紀元前2世紀から紀元後1世紀頃までの馬韓地域の楽浪との相互関係は韓半島の北漢江上流地域と漢灘江上流地域にだけみられ、その他の馬韓地域では資料が明確ではない²⁰¹。その反面、辰弁韓地域は紀元前2世紀末から紀元前1世紀中葉まで古朝鮮系統の文物が流入、紀元前1世紀後半から紀元後1世紀後半までは鍛造鉄器や漢式物品の受容が本格化して木棺墓が大型化し、木槨墓へと移り変わる特徴をみせながら、2世紀中葉には漢鏡を中心に漢の楽浪文物の流入が活発になる²⁰²。また、北部九州においては、弥生中期前半以降、中国系遺物が出土しはじめ、中期後半には漢式鏡、後期以降には漢式鏡や小環頭鉄刀などとともに貨泉が出土し、中国および楽浪文化の流入が確認されている²⁰³。

辰弁韓時代の韓半島南部地方の倭系遺物は、その重要性に比べて総合的に取り扱った研究は多くない。概括的な研究²⁰⁴と弥生式土器の分布²⁰⁵と倭系青銅器の流入の²⁰⁶問題を論じた研究はあるが、日本における韓国系遺物の出土事例やその研究に比べるとはるかに少ない²⁰⁷。辰弁韓時代の南海岸一帯の倭系遺物はおよそ弥生式土器と青銅器に分類され、このうち青銅器は武器形青銅儀器と倭系仿製鏡がある。土器と青銅器、2種類の倭系遺物は出土した以降の性格が異なり、分布範囲と集中的に出土する時期が互いに異なっている。三韓時代の辰弁韓は文献記録上、紀元後3世紀に登場する。しかし、この地域に出現する紀元前1世紀から紀元後1世紀の木棺墓や紀元後2世紀から3世紀の木槨墓に示される文化は、墓制の変化はあるが、土器様式はほぼ似通った地理的空間のなかに相互に連結したネットワークを示しており、同じ辰弁韓初期の段階と説明されている²⁰⁸。このうち、昌原茶戸里1号墓が築造された紀元前1世紀後半は、日本列島の弥生中期後半に該当し、楽浪郡を通じた中国との交渉が始まった時期である。この時期、交渉の結果、前漢鏡、瑠璃璧、金銅四葉座式金具など、楽浪系の遺物が北部九州の三雲南小路1号甕棺や須玖岡本D地点甕棺などに副葬され、武器形祭器としての変質が始まった中細形銅銚も副葬されるようになった。これらの出土遺物は韓半島南部で出土せず²⁰⁹、楽浪郡

²⁰¹ 김무중, 2006, 「馬韓지역 낙랑계 유물의 전개양상」『낙랑문화연구』동북아역사재단, pp.301-305

²⁰² 김길식, 2006, 「진변한지역 낙랑 문물의 유입 양상과 그 배경」『낙랑문화연구』동북아역사재단, pp.376-377

²⁰³ 七田忠昭, 2007, 「吉野ヶ里遺跡—佐賀平野に花開いた韓半島の文化—」『한일문화교류, 한반도와 일본규슈』, 국립중앙박물관, pp.111-115

²⁰⁴ 柳田康雄, 1989, 「朝鮮半島における日本系遺物」福岡県教育委員会 編『九州における古墳文化と朝鮮半島』学生社: pp.10-54

²⁰⁵ 武末純一, 1994, 「弥生時代の朝鮮半島系土器」『倭人の世界—楽浪海中の弥生文化—』(樞原考古学研究所附属博物館特別図録第43冊)

申敬澈・河仁秀, 1991, 「韓國出土の弥生土器系土器」小田富士雄・韓炳三編, 『日韓交渉の考古学』弥生時代編, 六興出版: pp.178-81

片岡宏二, 1999, 「朝鮮半島へ渡った弥生人」『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣, pp.130-48

²⁰⁶ 小田富士雄・武末純一, 1991, 「日本から渡った青銅器」小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学』弥生時代編, 六興出版: pp.155-59

²⁰⁷ 李盛周, 2002, 「南海岸地域에서 출토된 倭系遺物」『古代 東亞細亞와 三韓, 三國의 交渉』, 복천박물관

²⁰⁸ 이청규, 2009, 「茶戸里遺蹟의 青銅器와 辰弁韓」『考古学誌—昌原 茶戸里遺蹟 發掘 20周年 記念 特輯號』, 국립중앙박물관, p.86

²⁰⁹ 高倉洋彰, 1995, 『金印國家群の時代』, 青木書店

の交渉ルートの違いを提起することにもなった。しかし、中細形銅銚を通じた両者の連結は楽浪系遺物との共搬関係を考慮すれば、楽浪郡を通じた北部九州と前漢との交渉に韓半島南部の三韓地域の首長層の介在が確認され、これらの遺物によって前漢(楽浪郡)－韓半島南部(韓)－北部九州(倭)という3者間の交渉関係が公考古学的にも確認される²¹⁰。

一方、泗川勸島遺跡では、弥生系土器などの倭系遺物が顕著で、とりわけ、北部九州の漁村形遺物が数多く出土し、その範囲は九州および東瀬戸内海につながるものである²¹¹。こうした事実は、前述した文献史料の内容を裏付けるものである。

とりわけ、三韓と倭の交流は文献に表れているように鉄交易が活発であったが、日本の学界では弥生時代の鉄器生産と関連した鉄素材について自給説と舶載説があり²¹²、この時期の鋳造品および銑鉄はすべて流入品とみなして、日本に豊富な砂鉄も精錬遺構および製品が確認されず、この時期の鉄素材は韓半島から流入した「弁辰の鉄」と考えられている²¹³。そして、弥生中期末から鍛冶爐遺跡が北部九州に現れるが²¹⁴、山間地域の鉄器製作技術の直接重要が指摘されている²¹⁵。一方、弥生後期に三韓系土器および楽浪系土器が近畿・東瀬戸内にまで波及している²¹⁶。これは、大和、吉備、出雲地域の勢力が北部九州を通じて鉄を確保、朝鮮あるいは対馬と直接交渉して鉄を確保していたものと考えられている。とくに、この時期、三韓および楽浪との交流ルートは、最近韓半島南部において確認されている楽浪系土器遺跡(京畿道加平達田里、同華城旗安里、慶尚南道三千浦勸島、全羅南道昇州大谷里)や五銖錢遺跡(麗川郡巨文島、茶戸里1号)を通じて²¹⁷三韓と倭の通交網が韓半島南部を経て西海岸を結ぶ文献上の内容と一致することを窺わせる。一方、楽浪の性格が中国の先進文化受容の拠点²¹⁸という側面を強調する理解に対して、貿易拠点的性格²¹⁹が強調されるようになって以来、韓・倭の政治勢力と中国郡県との関係を威信材交易と捉え、韓半島の百濟、新羅など盟主国の交易独占および成長にともなう断絶や、相対的に段階が遅れた倭との楽浪の交易維持について論じられてきた²²⁰。

弥生中期後半以降、倭の各地では首長の威信材として中国系の文物、とくに漢鏡が多く埋納され、楽浪との交流が浮き彫りになる。また、楽浪系土器が対馬、壱岐、伊都国などで発見されているが、北部九州地域に分布する三韓土器と並存し、三韓土器の影響を受けた弥生式土器も存在する。とりわけ、茶戸里1号墳の銅銚は弥生の中細形銅銚であり、倭と嶺南地域の鉄を媒介とした関係があったことを推

210) 井上主税、2009、「茶戸里遺蹟에 보이는 倭 관련 고고자료에 대하여」『考古学誌—昌原 茶戸里遺蹟 發掘 20周年 記念 特輯號』、국립중앙박물관, pp.228-229

211) 武末純一、2009、「茶戸里遺蹟과 日本」『考古学誌—昌原 茶戸里遺蹟 發掘 20周年 記念 特輯號』、국립중앙박물관, pp.248-251

212) 後藤直・茂木雅博、2003、『東アジアと日本の考古学—交流と交易』、同成社

213) 村山恭通、1998、『倭人と鉄の考古学』青木書店

214) 宋井和幸、2001、『日本古代の鉄文化』雄山閣

215) 심봉근、1997、前掲論文

이남규、2002、前掲論文

216) 武末純一、2002、「日本九州 및 近畿地域の 韓國系 遺物—土器、鉄器生産關係를 중심으로」『古代 東亞細亞와 三韓、三國의 交渉』、북천박물관, pp.125-126

217) 九州考古学会、嶺南考古学会、2000『考古学から見た弁・辰韓と倭』

218) 三上次男、1966、『古代東北アジア史研究』、吉川弘文館

219) 김원룡、1967、「삼한시대의 개시에 관한 일고찰」『동아문화』7

220) 李鍾旭、1994、「韓倭의 政治勢力과 樂浪郡帶方郡의 關係」『韓日古代文化의 連繫』、韓日文化交流基金

測させる²²¹。また、韓半島から伝わった小銅鏡は対馬、佐賀、福岡、大分、熊本および岡山、大阪まで拡大している²²²。とくに、石井入口(大分県竹田市)、二塚山(佐賀県上峰村)で発見されたのは、魚隠洞および坪里洞のものと同じ鋳型を使用した同範鏡と確認されており、嶺南地域との交流を示している²²³。また、弥生時代に祭祀後埋納された広形の銅銚、銅戈が大邱の晩村洞および金海良洞里などから発見されているが、韓国では副葬品および生活空間で確認されており、両地域の文化的独自性が表れている²²⁴。

したがって、こうした状況を検討すれば、考古学的資料に表れた満州—韓半島西北部—中南部—日本列島と結ばれた古朝鮮の青銅器文化の交流の伝統が、その後の楽浪との関係のなかにも確認され、古朝鮮時代に古朝鮮—韓—倭とつながる政治文化的海上交流の状況を設定しうる。

4. 三国初期(西暦3世紀まで)の倭との交流

三国初期の倭との交流に関する記事は、『三国史記』にみられる新羅—倭関係の記事が中心である。従来、『三国史記』新羅本紀の「倭」関連記事に対する日本の学界の基本的な立場は、4世紀代までの関連時期は事実と見なしがたいというものであった。すなわち、『三国史記』新羅本紀の「倭」関連の記事が『日本書紀』の記事と一致せず、造作されたものとみなしたり²²⁵、倭国関連の史料が中国の史書の影響を受けて造作され、とりわけ紀元前後および1、2世紀の倭人、倭兵関連時期は、『三国史記』の編纂時の史官が造作して挿入したものとみなすものであった²²⁶。また、『三国史記』にみえる「倭」関連の記事を「倭人」もしくは「倭兵」と表記する記事群と「倭国」と表記する記事群に区別し、倭人、倭兵関連の記事群は6世紀の真興王代の『国史』編纂と関連があるものとし、倭国関連の記事群は、8世紀後半以降、新羅下代に作られた史書を原点としたとする見解もある²²⁷。また、「倭」は加羅地方の別名であり、「倭」の根拠地が加耶地方であるとみる説もあるが²²⁸、「倭」の加耶地域居住説については日本学界でも否定的な立場をとる論者が多い。北朝鮮の金錫亨もこうした立場に立っている²²⁹。こうした観点から新羅を襲撃した倭人は日本列島から季節的に海を越えて来襲して物資や人々を略奪する海賊集団であり²³⁰、新羅本紀の倭人、倭兵は対馬島を兵站地とする海賊で、その実態は北九州の倭人であると考えた²³¹。

こうした日本学界の立場に対して、韓国学界では、九州地域の独自の政治勢力が『三国史記』新羅本紀などにみえる「倭」の実態であるとする傾向が強く、畿内のヤマト政権を排除しようとするのが一般

²²¹ 武末順一、2005、「三韓と倭の考古学」『古代を考える日本と朝鮮』吉川弘文館

²²² 高倉洋彰、1990、『日本金属器出現期の研究』学生社

²²³ 小田富士雄、1982「日韓地域の同范小銅鏡」『古文化談叢』9

²²⁴ 武末順一、2005、「三韓と倭の考古学」『古代を考える日本と朝鮮』吉川弘文館

²²⁵ 津田左右吉、1912、「新羅征討地理考」『朝鮮歴史地理』1

²²⁶ 鈴木英夫、1977、「三国史記新羅本紀倭人倭兵記事の検討」『國史学』101

²²⁷ 井上秀雄、1970、「日本書紀の新羅傳説記事」『日本書紀研究』4

²²⁸ 井上秀雄、前掲論文

これ以前に、三品彰英も『三国史記』初期記録にみえる加耶と「倭」の同質性を主張したことがある(三品彰英、1959『日本書紀朝鮮関係記事考證』上、吉川弘文館、pp.170~172)

²²⁹ 김석형、1966、『초기조일관계연구』

²³⁰ 旗田巍、1975、前掲論文

²³¹ 山尾幸久、「任那日本府と倭について」『史林』、56-6

的である²³²。『三国史記』新羅本紀に集中する倭関連の記録に表れた特性を把握すべく、まず関連史料を表に整理すれば次の通りである。

年代			倭				新羅		
王	年代	月	表現	行為	地域	結果	対応	結果	関連事件
赫居世	8年		倭人	行兵欲	邊	聞始祖有神德乃還			
	(前50)			犯					
南解	11年		倭人	遣兵船百餘艘	海邊		發六部勁兵	以禦之	
	-14			掠	民戶				
脱解	1年		倭國						脱解本多婆那國所生也其國在倭國東北一千里
	(57)?								
脱解	3年	夏	倭國				結好	交聘	
	-59								
脱解	17年		倭人	侵	木出島		王遣角干羽鳥禦之	不克羽鳥死之	
	-73								
祇摩	10年	夏	倭人	侵	東邊				
	-121								
祇摩	11年	夏	倭兵				王命伊翌宗等諭止之		大風東來折木飛瓦至夕而止都人訛言“倭兵大來”爭遁山谷
	-122								
祇摩	12年	春	倭國					講和	
	-123								
阿達羅	5年	春	倭人	來聘					
	-158								
阿達羅	20年	夏	倭女王卑彌乎	遣使					
	-173			5月					
伐休	10年	6月	倭人	大饑來		求食者千餘人			
	-193								
奈解	13年	夏	倭人	犯	境		遣伊伐滄利音將兵拒之		
	-208								
助賁	3年	夏	倭人	猝至	圍金城		王親出戰賊潰走	遣輕騎追擊之殺獲一千餘級	
	-232								
助賁	4年	5月	倭兵	寇東邊					
	-233								
	4年	秋	倭人	戰	沙道		伊滄于老與倭人戰沙	乘風縱火焚舟賊赴水	
	-233								

²³²⁾ 李鍾恒、1977、「三國史記에 보이는 倭의 實體에 대하여」『國民大學論文集』(인문과학편) 11
延敏洙、1988・1989、「5世紀 以前의 新羅의 對倭關係」『日本學』7、8・9
金澤均、1990、「三國史記 新羅의 對倭 關係 記事 分析」『江原史學』6
李鍾旭、1992、「廣開土王陵碑 및 三國史記에 보이는 ‘倭兵’의 正體」『韓國史市民講座』11

							道	死盡	
沾解	3年 -249	夏 4月	倭人	殺舒弗 邯于老					
儒禮	4年 -287	夏 4月	倭人	襲	一禮部	縱火燒之 虜人一千 而去			
儒禮	6年 -289	夏 5月	倭兵	至			聞倭兵 至理舟 楫繕甲 兵		
儒禮	9年 -292	夏 6月	倭兵	攻陷	沙道城		命一吉 滄大谷 領兵救 完之		
儒禮	11年 (294)	夏	倭兵	來攻	長峯城	不克			
儒禮	12年 (295)	春	倭人					王謂臣下曰“倭人屢犯我 城邑 百姓不得安居 吾欲 與百濟謀 一時浮海 入擊 其國 如何” 舒弗邯弘權 對曰 “吾人不習水戰 冒 險遠征 恐有不測之危 況 百濟多詐 常有吞噬我國 之心 亦恐難與同謀” 王 曰 “善	
基臨	3年 -300	春正 月	倭國					與倭國 交聘	

上記の表のうち、注目されるのはすでに指摘されるように、倭に代表される存在の新羅来襲記事が夏4、5、6月に集中する事実である。この時期は、もともと人々がもともと困窮する時期であり、食糧の略奪を念頭においた海賊的な性格をもった存在²³³としてとらえるのが現実的であろうと考えられる。とりわけ、倭が文化交流や対外交流のために窓口とした西南海岸ルートを活用したことに関連付けてみれば、これらの交流ネットワークが遮断される地域に対する攻撃を避けたことが分かる。すなわち、新羅の対外中継的性格は相対的に弱く、その新羅に対する集中的な海賊行為が行われたものとみられる。

結論

本研究の結論として、以上の研究内容を整理することにする。

東アジアの稲作に関連する議論は、栽培稲の起源と稲作農法、とくに水稻耕作の伝播過程に対する論議を中心に展開してきた。現存する稲は大別して長粒形のインディカ米と短粒形のジャポニカ米があるが、古代米のDNA分析によると、中国の古代米はすべてジャポニカ米に分類されることから、二元起源説が有力視されている。この事実は韓半島の稲と日本列島の稲の起源地が中国南部と直接的なつ

²³³⁾ 旗田巍、1975、前掲論文

ながりをもっていたことを示し、日本列島で確認された稲の一部には南方伝来の痕跡もみられるが、大部分は韓半島から伝来した稲が大部分であることが確認されている。

韓半島の稲作に関連する松菊里類型の文化は、無文土器中期もしくは後期時代に編年され、韓半島で水稻耕作文化が本格的に展開し、灌漑施設を伴う水稻耕作が完成した時期にあたる。この文化が発生した地域は忠南西海岸の錦江下流域であり、この松菊里文化が本格的に日本列島に影響を与え、北部九州地域を中心に日本の土着文化を形成した。

稲作農耕は、とくに水稻耕作の技術だけでなく、それに伴う社会体制の移動によるものであり、韓半島の青銅器文化様相と軌を一にし、環濠集落と松菊里型住居地、支石墓を特徴とする集団によって農耕文化が伝播したことを示している。竪穴住居と貯蔵穴の別途配置など新しい住居形式や石棺墓に代表される松菊里文化の影響は有明海沿岸の佐賀平野の吉野ヶ里遺跡と久保泉丸山遺跡でもほぼ同時に出現している。

日本の弥生時代の年代観は、2003年に歴史民族博物館チームが土器の有機物に対するAMS(イオンビーム加速器質量分析法)測定による新しい年代観を根拠に弥生時代の開始時期が紀元前930年まで遡るという紀元前10世紀説が提起され、弥生時代の開始年代について大きな混乱が生じている。まず、弥生時代の編年を歴博のAMS編年に依拠すると、早期(先I期、紀元前10-9世紀)、前期(I期、紀元前8-4世紀)、中期(II-IV期、紀元前4-紀元後1世紀)、後期(V、VI期、紀元後1-3世紀)となる。これに関し、日本学界は賛成の場合は韓国の青銅器文化の年代を遡及させ反対の場合は年代測定の過信を問題とするかあるいは変動可能性を提起して、韓半島の関連遺物の年代との不一致を指摘している。しかし、現在韓国の学界はこうした日本学界の立場について懐疑的である。したがって、この問題は韓半島などの年代が同様に上昇するとき承認可能な見解であり、日本列島だけの一般的な年代上昇は無意味である。

日本列島、とくに九州地域で出土した韓半島系の土器文化の様相は刻目突帯文土器、孔列文土器、丹塗研磨土器、松菊里式土器、粘土帯土器などである。弥生早期の土器である夜臼式土器(刻目突帯文土器)の始原について、日本の学界では韓半島伝來說と縄文土器継承説があるが、弥生早期の土器である刻目突帯文土器の出現問題については韓日の研究者で意見が異なっているが、水稻耕作を基盤とした文化体系である松菊里文化が韓半島から日本列島に渡り、弥生文化が誕生したという事実は大部分同意している点である。

一方、韓半島地域の初期鉄器時代の代表的な文化様相である粘土帯文土器文化は、古朝鮮と深い関係を持つ遼西-遼東地域の住民移住によって韓半島に登場した文化であり、紀元前6世紀末、5世紀初めに設定されている。韓半島と日本列島間の金属文化の交流において、韓半島には琵琶形銅剣と銅矛で構成される純粋な青銅器文化が明らかに存在したが、日本ではこれまでの調査と研究の成果からみる限り、そうした段階が明確ではなく青銅器や鉄器がほぼ同時に韓半島から日本列島に流入している。日本の学界では弥生青銅器文化の形成に現れる韓半島の青銅器文化の受容と定着の様相を遼寧式銅剣(琵琶形銅剣)や磨製石剣、石鏃を副葬する支石墓などの墓制に代表される「遼寧青銅器文化複合」を受容したものと考えられる。しかし、この文化は中国中原の青銅器文化とは明らかに異なり、遼東半島、韓半島および満洲地域を中心にした琵琶形銅剣と銅矛、支石墓によって構成される青銅器

文化の内容を示しているという点において、韓半島を中心とした青銅器文化と考えられている。一方、日本の学界では最近、青銅器の列島化の時期を中期前半(汲田式甕棺時期)に遡らせ、韓半島の青銅器の輸入様相に一種の選択があったことを強調している。しかし、青銅器の鋳型、儀器、銅剣などの様相は韓半島と同一の背景をもって使用されたことを示しており、個別選択ではなく、体系性を持った文化が伝播したとみる方が有効的な解釈である。

弥生時代の鉄器文化の展開過程における特徴は、前期に磨製石器に代わる鉄製工具類がまず流入し、次第に生産が可能になり、鉄鏃に続いて中期の段階に鉄製武器類(剣、刀、鉾など)の使用が始まったが、これに比べて鉄製の農具類はその出現時期が相対的に遅れている。すなわち、韓半島から伝来した「大陸系の磨製石器」である蛤刃石斧、片刃石斧、有溝石斧、半月形石刀などが生産道具の主流をなすなかで、舶載されて入ってきた一部の鉄製工具が使用されはじめる弥生時代前期の段階はもちろん、以後土着的な形態を持った鉄製工具が製作されはじめる段階である北九州における前期末―中期前半、畿内における中期前半頃にも鉄素材は日本列島内で生産できず、全面的に韓半島からの流入品に依存していた事実は、当時韓日両国間の交流段階において最も重要な事項と見ることができにも拘わらず、いまだこれに対する集中的な研究が充分なされていない。

韓半島と日本列島の青銅器は初期には墓の副葬遺物として大部分が出土している。韓半島の青銅器は主に墓の副葬品として日本列島では初期の副葬品形式から次第に埋納された祭器として大部分発見され、副葬と埋納という様相の変化が現れるが、同一の系統から変化していく様相を示しているという点から器種や形式を中心に検討されてきた。

鉄器文化段階の代表的な武器は細形銅剣、細形銅矛、細形銅戈などである。とくに、日本列島では百数十点の細形銅剣と、細形銅矛、細形銅戈がそれぞれ各30余点出土しており、鋳型も出土している。

一方、儀器として韓半島で出土するのは、多鈕鏡、銅鈴、異形銅器、銅鐸などであり、このうち銅鏡や銅鐸は韓半島と日本列島で儀器として共通した機能を担った。祭祀行為を通じて青銅器を埋納する儀礼に関連した遺跡は韓半島でも存在すると考えられているが、日本地域では紀元前1世紀頃の遺跡から相当数確認されている。銅鐸の場合、馬韓社会に存在した蘇塗の大木に鼓や鈴をかけた儀式行為と関連するものとして注目される。

韓半島と日本列島に共通して登場する墓制のなかで、日本の支石墓はその系譜が韓半島にあり、韓半島の支石墓のなかでも碁盤式支石墓を主体とし、蓋石式支石墓も存在することが共通点として指摘されている。

古朝鮮時代の倭との関係をみれば、倭と中国との最初の交流記事として言及される『山海経』記事の内容は、実は古朝鮮、蓋国と倭との間に維持されていた政治的隷属認識および文化的交流に基づいた伝聞や、関連知識、また物品の交流に基づいたものと見られる。そして、これらの間に交流があったとすれば、古朝鮮および蓋国を通じた交流としてこれらの中継的役割が存在したことが確認される。衛満朝鮮に関連する考古学的資料は、細形銅剣文化と特徴付けられる。衛満朝鮮の時代である紀元前2世紀頃、韓半島から日本列島の壱岐を経由して北九州地域まで衛満朝鮮系統の細形銅剣文化や韓半島南部地域の無文土器文化が伝わった。韓半島の細形銅剣文化は北九州を中心に拡散し、佐賀県宇

木汲田甕棺墓群、福岡県吉武高木墓群、福岡県吉武大石墓群、山口県梶栗浜石棺墓群、福岡県飯倉丸尾甕棺墓などにおいて発見された青銅遺物は細形銅剣2-3段階と推定されるもので、大部分は韓半島から直接流入したものである。遺跡は甕棺墓、木棺墓、石棺墓であり、細形銅剣、銅鉞、銅戈、多鈕細文鏡、銅釧、管玉、勾玉、丸玉などがセットをなして出土している。こうした様相は慶州九政洞、入室里、益山平章里遺跡に連なり、全南咸平草浦里石棺墓一括出土品と類似する。また咸南李花洞土壙墓出土遺物でもこれに類するセットが出ており、同一時期に編年可能である。したがって、この時期は中国の前漢前期、我が国の衛満朝鮮時代に編年される。

古朝鮮以来の倭との交流体系と内容は衛満朝鮮の崩壊によって、代わって交流を統制するようになった楽浪など郡県勢力が既存の交流網を活用しただけでなく、関連する政治勢力の援助と協力を通じて交流を大成ったものと見られる。このような事実は前章で検討した靑島、金海など南海岸一帯に分布する中国系遺物を出土する遺跡から倭系遺物が搬出されることにより確認できる。

三韓と三国初期の倭との交流において注目されるのは東夷地域における重訳外交の主体として、古朝鮮だけでなく三韓および三国が登場する事実である。すなわち、中国は周辺勢力との関係において、遠邦の言語が通じない地域との交流にあたっては、言語を通訳する存在を前提として交易を展開した。このような様相は、『史記』を執筆した司馬遷の自序にこれらとの交流が重訳を通じて行われたことを強調していることによって確認される。東夷地域の場合、高句麗—肅慎、百濟—新羅の例が確認されるように、重訳によって中国との外交関係を形成した国家や勢力の様相は、担当国家と被重訳国家また勢力間には附庸関係など政治的な上下関係が存在した状況のなかで中国との外交関係が形成された。

こうした内容は、三韓と倭との交流においてもよく現れている。韓と倭との交流の様相は韓と倭との相互交流とともに中国郡県との交流を韓が中継する重訳的性格の交流が展開した事実を通じて三韓社会の交流中継力量が重訳外交として表れている。すなわち、後漢、魏、晋代までの中国と韓、倭の交流を見れば、倭の魏、晋との交流が重訳による入貢であったことが確認され、前述の重訳国家と被重訳国家間の政治外交的關係が想定される。そして、韓と倭の間で交流された物品は鉄、銅、織物などが中心であった。

三国初期の倭との交流関連記事は、『三国史記』に登場する新羅—倭関係記事が中心である。新羅を襲撃した倭人は日本列島から季節的に海を越えて品物や人々を略奪する海賊集団であり、新羅本紀の倭人、倭兵は対馬を兵站とする海賊であって、その実態は北九州の倭人であると考えられる。

以上の研究結果を通じて次の点を確認した。

まず、韓日先史文化の交流に対する韓国と日本の学界の研究成果を整理すると、日本の弥生文化成立の重要要素である水稲耕作、青銅器、鉄器などの金属文化の伝来様相について、従来日本学界および概説書ではその伝来主体や地域について曖昧に「大陸」とのみ表現する傾向があった。しかし、今回の研究活動を通じて関連する研究成果では具体的な内容が確認されており、これを明示する必要がある。例えば、稲作文化の場合、韓半島の松菊里文化の影響が確実に確認されており、青銅器の場合、細形銅剣、すなわち韓国式銅剣とも呼ばれる韓半島中心の青銅文化が日本列島に伝わったことがより具体的に言及される必要があると考えられる。

次に、日本の先史考古学学会が最近行ったAMS(イオンビーム加速器質量分析法)測定による新し

い年代間を根拠に弥生時代の開始時期を紀元前930年まで遡及しなければならないという紀元前10世紀説の主張は、その前提条件として弥生文化の起源である韓半島の農耕および青銅器文化の年代も同時に上昇させなければならない。しかし、韓国学会の全般的な研究内容はこのような年代上昇に懐疑的な側面が強い。

第3に、日本列島の対外交流に対する最初の歴史記録である『山海経』や『漢書』地理志の記録について、日本学会では中国との直接的な交流の出発と根拠とすることが多い。しかし、この度の研究を通じて、古朝鮮、蓋国などと倭の間に存在した交流と緊密な関係を説明した内容であることが見えてきた。また、衛満朝鮮以降、成立した楽浪・帯方などの郡県との関係も同じく、衛満朝鮮と倭との間に存在した交流関係が前提にあったという点で、古朝鮮と倭との関係が確認された。従来、こうした理解が両国の概説書や研究において明示されておらず、これに対する事実とその意味付けが必要である。

第4に、重訳外交の主体として、古朝鮮、三韓、三国の役割確認である。この度の研究で古朝鮮および三韓を包括した倭との関係を説明する用語として重訳外交が確認された。すなわち、東夷世界が中国との関係を維持するにあたって、重訳を行う重訳国家と被重訳国家や種族の間に附庸国的な性格の関係が存在したことが明らかになった。また、三韓が倭と郡県とを結ぶ重訳を行ったという記録からこの関係が継続的に『三国遺事』されたことが分かった。こうした古代の重訳外交を展開した三韓と倭殿関係についてより具体的に検討していく明らかになった。

第5に、先史、古代の韓日関係を理解するためには今後、両国の考古学的成果を体系化して統合可能研究が必要である。